

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. XIII, 2022

仙石山仏教学論集 第13号 (令和4年)

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻

浅野学

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻

浅野学

要旨

本稿は、これまで未公表であった興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』（以下、『法華論』）のテキストを全文翻刻し、以て研究の一資料として供することを目的としている。

解題では、臨済宗円通山興聖寺に伝わる『法華論』の古写本、古刊本の特徴や、そのテキスト系統などについて、先行研究を踏まえて述べた。翻刻は、興聖寺蔵の菩提留支訳『妙法蓮華経憂波提舍』一卷本（平安時代院政期写本）を底本として、校本に興聖寺蔵の菩提留支訳『妙法蓮華経憂波提舍』二卷本（鎌倉時代刊本）、および大正蔵本とその校本（宋本・元本・明本・宮内庁本）を用いて行った。

興聖寺一切経の中には、『法華論』の一卷本と二卷本の存することが、『興聖寺一切経調査報告書』（一九九八年）によって知られていた。しかし、その時点では書誌のみの公表であったため、具体的な内容は知られていなかった。幸いにも筆者は、二〇一九年頃に興聖寺本『法華論』の影印を見る機会を得て、二〇二〇年度の日本印度学仏教学会学会術大会では、少しく資料紹介を行った。その後、二〇二二年一月には、実地調査に参加して実物を確認することができた。調査によって新たにわかったことは本稿で報告した。

解題

一 はじめに^①

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』（略称で、『法華論』『法華経論』『妙法蓮華経論』ともいう）は、一九九八年刊行の『興聖寺一切経調査報告書』（以下、『調査報告書』）によって初めて知られるようになった資料である。『調査報告書』には、興聖寺に一巻本と上下二巻本との計二点の『法華論』が存することが記されている。^② しかしながら、『調査報告書』に公表された内容は書誌のみであったため、それ以上の具体的な内容は不明であり、ただ現存することだけが知られている資料であった。

二〇一九年頃、筆者は国際仏教学大学院大学の落合俊典教授のご厚意により、興聖寺本『法華論』計二点の影印を拝観する機会に恵まれた。先の影印に基づいて発表した拙稿「二〇二二」では、興聖寺本『法華論』の古写本・古刊本の本文内容を、初めて斯界に紹介した。^③ 以降、少しく拙稿への反響なども頂き、興聖寺本は『法華論』の新出資料として徐々に知られるようになって来た。

本稿では、興聖寺蔵院政期書写本『法華論』一巻本を底本とする全文翻刻を実施した。その際には、同寺蔵鎌倉時代刊本『法華論』二巻本を校本の一本として用いた。本翻刻は、自身の『法華論記』研究における文献資料の一助とする為でもある。解題は、近年盛んに行われるようになった『法華論』の文献学的研究の成果を踏まえたものである。

二 興聖寺一切経について

臨済宗興聖寺派の本山円通山興聖寺は、京都市上京区堀川通寺之内上ルに所在する禪刹である。同寺は、開山の虚応円耳（一五五九～一六一九）が文禄年間に創建した大昭庵の敷地に、武将茶人の古田織部（一五四三～一六一五）が後陽成天皇（一五七二～一六一七）の勅を得て建立した諸堂にはじまり、通称「織部寺」とも呼ばれている。^⑤興聖寺には、丹波国桑田郡小川郷（現在の亀岡市）にあった西楽寺で平安後期院政時代に書写された西楽寺一切経を中心として、後世の補写ならびに版経を含んだ、計五二六一帖の一切経が現存する。^⑦興聖寺一切経のものである西楽寺一切経は、解脫房貞慶（一一五五～一二二三）によって南山城の補陀洛山海住山寺（木津川市に所在）に伝えられた後、貞慶の十三回忌には彼の弟子によって一切経五千巻の欠巻が補写され、経蔵（文殊堂）に納められたという。^⑧その海住山寺一切経が、慶長年間に虚応禪師によって興聖寺に将来された。^⑨興聖寺一切経の意義について、佐藤禮子「二〇一四」は、

當寺は、平安寫經一切經六千餘巻を珍藏すること知られる。なかでも信行『三階佛法』や、世界最古の寫本である『大唐西域記』、藤善眞澄氏が資料的價値を裏付けた『續高僧傳』は斯界の大いに注目するところであった。^⑩

と述べている。また禪宗六祖慧能（六三八～七二三）の説法記録である『六祖壇經』の興聖寺旧蔵本は、乾徳五年（九六七）の恵昕分卷本の内容を承けついで宋版大蔵經の覆刻五山版であり、敦煌本につぐ内容を持った古本とし

て知られている。¹¹

三 『法華論』について

世親（四～五世紀頃。Vasubandhu）撰『法華論』は、インド撰述の法華経注釈書として、唯一現存するものであり、古くから法華経の研究において重要視されてきた論書である。同書の梵本や蔵訳は早くに散逸して伝わらな
いが、二種の漢訳が現存する。

芝増上寺蔵の高麗再雕本を底本とした大正新脩大蔵経（以下、大正蔵）には、菩提留支¹²（五～六世紀頃。菩提流支とも音写する。Bodhiruci. 以下、文脈によって区別し、留支或いは流支と略記）共沙門曇林等訳『妙法蓮華経憂波提舍』二巻と、勒那摩提（五～六世紀頃。Ratnamati. 以下、摩提と略記）共僧朗等訳『妙法蓮華経論優波提舍』一巻が収録されており、『法華論』の現行本として知られている。¹³ 智昇（八世紀頃）撰『開元釈教録』（以下、『開元録』）には、摩提訳について「妙法蓮華経論一卷…中略…（初出與菩提留支譯者大同小異）」¹⁴とあり、留支訳について「法華経論二巻…中略…（第二出與前寶意出者同本）」¹⁵とある。訳出の前後関係は、初出の摩提訳が先であり、寶意（摩提）と同じ底本を使った留支訳は第二出で後となる。¹⁶

大正蔵本の両訳を見て直ぐに気が付くことは、調卷の違いと、帰敬頌が留支訳には有り、摩提訳には無いことである。しかしながら、摩提訳の校注を見ると、諸校本には留支訳の帰敬頌とは若干異なるものの、確かに帰敬頌を有することが示されており、¹⁸ 元来これら両訳の内容が、『開元録』のいうように「大同小異」であることも相俟って、混乱を生じさせている。¹⁹ 両訳の間には、このようなテキスト上の異同・混同の問題が枚挙に遑がない。

また『開元録』には、義浄（六三五～七一三）がその晩年にあたる唐の景雲二（七一）年に訳した『法華論』

五巻について記しているが、義浄訳『法華論』は『開元録』が著された頃には既に失われていて、撰者や訳された回数は不明であるという。²⁰⁾

チベット語訳『法華論』については、望月海慧「二〇二〇A」によると、九世紀に編纂された『パンタンマ目録』には、「七三二六『聖法華釈』阿闍梨ヴァスバンドウ作 (736 *Phags pa Dam pa'i chos pad ma dkar po'i bshad pa* / *stob dpon Ba su ban dhus mdzad pa*)」とあり、十三世紀に編纂されたチョムデンリクレル (*bCom ldan ral gri* 一二二七―一三〇五) の目録にも確認できるといふ。また至元間に編纂された『至元法宝勘同総録』もチベット語訳『法華論』の存在を伝えるが、後のプトウン・リンチェンドゥブ (*Bu ston rin chen grub* 一二九〇―一三六四) の目録では、「それらを探すべきである」の項目に置いており、それまでに散逸していたことを示しているという。²¹⁾

漢訳からのチベット語訳のある法相宗の基(六三三―六八二)撰『妙法蓮華経玄賛』(以下、『玄賛』)には、『法華論』からの引用がよく見られるが、望月海慧「二〇二〇B」は、九世紀前半よりも前の訳出となるチベット語訳『玄賛』の訳者が『法華論』のチベット語訳を知らなかったと考えていいであろう²²⁾と述べており、また「インド・チベット文献において、世親が『法華経』の注釈書を著したという情報も確認できていない²³⁾」とも述べている。²⁴⁾

四 興聖寺本『法華論』について

『調査報告書』の「一切経目録」によって、興聖寺に一巻本の菩提流支訳『妙法蓮華経憂波提舍』と、上下二巻本の『妙法蓮華経優波提舍』との計二点の『法華論』が所蔵されていることが初めて公表された。この目録には資料毎の書誌が記されており、二点の『法華論』については、一見して書名中の「憂」と「優」の字が異なる

ことと、調卷の違いがわかる。また一巻本の『法華論』は平安時代の資料と判定されており、訳者名に「照玄沙門都三藏法師菩提流支」とあることなどもわかる。²⁵一方、上下二巻本の『法華論』は鎌倉時代の資料と判定されているが、訳者名は記されていない。²⁶

『調査報告書』付篇の「編年表」の解説によると、「興聖寺一切経全五二九四巻のうち、奥書に年号を記載したもの（干支記載を含む）は八九九巻ある」という。「編年表」を見ると、興聖寺一切経の中で奥書を有する平安時代書写の写本の計七五五巻は、一段と古い延暦四（七八五）年の奥書を有する『大唐西域記』巻第一を除く七五四巻が、平安時代院政期の書写であることがわかる。²⁸このことから「一切経目録」で平安時代書写と判定されている一巻本『法華論』は、具体的には院政期の写本と想定できるであろう。

また同付篇の地主智彦編「貞元新定釈教目録対照一覧」（以下、「貞元録対照一覧」）では、一巻本の流支訳を、『貞元新定釈教目録』（以下、『貞元録』）巻第二十九入藏録上の「妙法蓮華経論一卷」（摩提訳）と対応させており、上下二巻本を「法華経論二巻」（留支訳）と対応させている。²⁹

国際仏教学大学院大学日本古写経研究所が作成した『日本現存八種一切経対照目録（改訂版）』（以下、『八種目録』）および日本古写経データベースは、興聖寺一切経の現存状況について、「貞元録対照一覧」の内容に基づいており、興聖寺蔵『法華論』の一巻本を摩提訳（大正蔵一五二〇と対応）、二巻本を留支訳（大正蔵一五一九と対応）として載せている。³⁰

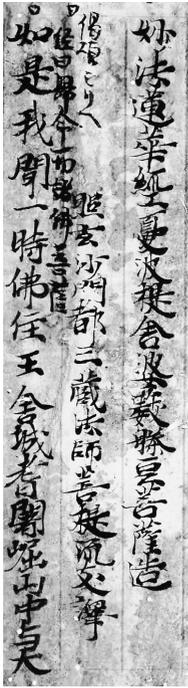
興聖寺一切経の中に二点の『法華論』が存することを伝えた『調査報告書』の「一切経目録」は、意義のある成果であったが、書誌のみの公表であったため、それ以上の具体的な内容まではわからなかった。そのような中、幸いにも筆者は田珍（八一四〜八九二）撰『法華論記』（以下、『論記』）の研究をしていたこともあり、令和元（二〇一九）年頃に国際仏教学大学院大学の落合俊典教授がご所持されていた、興聖寺本『法華論』の影印を拝観さ

せて頂く貴重な機会を得た。

影印を見ると、写本で一卷本の菩提流支訳（以下、院政期写本）には、巻首に確かに「照玄沙門都三藏法師菩提流支譯」とあること、帰敬頌がないこと、また「如是我聞」の一句から始まる本文の前に、「偈頌シリへ／経曰歸命一切諸佛菩薩^①」という書入れがあることがわかった。

院政期写本の巻首二行目にある「照玄沙門都」という流支の肩書は、調べてみると、現存する流支訳（或いは留支）の諸本には全く見られないものであることがわかった。興聖寺本『法華論』に、この珍しい流支の肩書があることは、既に『調査報告書』で報告されていたが、その後、特に注目されることはなかった。通常、流支の肩書は大正蔵本のように「後魏北天竺三藏菩提留支」と記されるか、或いは叡山版のように「三藏法師菩提流支」と記されるので、興聖寺本の「照玄沙門都」という表記は大変興味深い。なお「照玄沙門都」の「照」字は音通による誤写と考えられ、正しくは「昭」字である。「昭玄沙門都」は、流支の僧官としての位であり、北魏に置かれた宗教行政を管轄する昭玄曹の副沙門統に相当する都維那を指している^②。

巻首の二行目から三行目にかけての行間辺りに見られる書入れは、「如是我聞」の右側にあり、「如」字の上と、書入れの「経」字の右上辺りには、補入記号が付されている。「経曰歸命一切諸佛菩薩」（以下、帰命頌）の一文は、現行の大正蔵本およびその校本には見られないが、古蔵（五四九―六二三）撰『法華論疏』（以下、論疏）や



院政期写本の巻首

義寂積・義一撰（七―八世紀頃）『法華經論述記』（以下、『述記』）、円弘撰（七三三年以前）『妙法蓮華經論子注』（以下、『子注』）が引用する『法華論』に見られることから、古形の流支訳の一特徴として、本文の系統

妙法蓮華經憂波提舍卷上

婆數樂皇菩薩造 三藏法師菩提留支譯

頂礼正覺海 淨法無為僧 為深利智者 開示毗伽典

祇慮空尼尊 及菩薩聲聞 令法自他利 略出勸伽論

歸命迦末世 現在佛菩薩 弘慈降神力 願施我無畏

大悲止四魔 護菩提增長

與 妙法蓮華經序品第一

聖經曰 如是我聞 一時佛住王舍城耆闍崛山

中興大比丘衆 万二十人 俱皆是阿羅漢諸

寺 漏已盡 無復煩惱 心得自在 善得心解 脫善

鎌倉時代刊本の卷首

を判定する上で重要視されている。³³

一方、二巻本の影印を見ると、こちらの訳者名は「留」字で表記される「菩提留支」であること、本文の字様から刊本であること（以下、鎌倉時代刊本）、帰敬頌があること、「如是我聞」の前（同行内）に「経曰」の二字があることがわかった。本文が「経曰如是我聞」から始まる『法華論』は、管見の限り他には見当たらず、改めて調べてみると現行本とその校本にはなく、江戸期の刊本などにも

ない、鎌倉時代刊本に特有の珍しい用例であった。或いはこの「経曰」は、帰命頌「経曰帰命一切諸佛菩薩」の最初に置かれる「経曰」と関係のある用例であるかもしれない。

影印によって、二点の興聖寺本『法華論』の内容が、一卷本で写本の流支訳と、二巻本で刊本の留支訳であることが確認でき、「貞元録対照一覽」とそれを踏襲している『八種目録』に記載される所の『貞元録』という摩提訳の「妙法蓮華經論一卷」³⁴は、興聖寺一切經の中に存していないことが明らかとなった。

「貞元録対照一覽」において、原本では流支訳と記されている一卷本の院政期写本を、『貞元録』入藏録の摩提訳と対応させているのは誤解と考えられ、恐らく興聖寺藏の帰敬頌がある二巻本の鎌倉時代刊本は、『貞元録』入藏録の「法華經論二卷（初有歸敬頌者是或一卷）」と対応しており、帰敬頌がない一卷本の院政期写本は、『貞元録』の「妙法蓮華經論一卷」と対応していると判定されていたのであろう。³⁵『貞元録』入藏録の「法華經論二卷」は留支訳のことであり、「妙法蓮華經論一卷」は摩提訳のことである。帰敬頌を有していないが、一卷本の院政期写本には確かに「菩提流支譯」と記されており、『貞元録』入藏録にある「法華經論二卷（初有歸敬頌者是或一卷）」の「或一卷」と一致しているため、帰敬頌のない流支訳ということになる。³⁶

大竹晋「二〇一一」は、「吉藏の『法華論疏』巻上では、『法華論』を載せる現存最古の經録である隋の法經等『衆經目録』（五九四年編纂）と同じく流支訳のみに言及し、摩提訳に言及しない」³⁷と述べており、また「ただしその一方で、菩提流支訳について二つの系統のテキストがあったことを伝えている」³⁸と述べて、『論疏』の該当箇所を以下のように引用している。

但此論有二本。一無前序、直云經曰歸命一切諸佛菩薩。此是集經人請護之辭也。二有歸敬。此是天親自作。³⁹

この一節について、大竹晋「二〇一一」は以下のように纏めているが、読み違えている箇所（傍線部。傍線は筆者による）があり、また括弧内の内容は大竹氏の解釈である。

第一のテキスト……前序あり（婦敬頌なし）。婦命頌から始まる。

第二のテキスト……婦敬頌あり（前序なし）⁴⁰。

吉藏は「一無前序」⁴¹と述べているため、大竹晋「二〇二一」が第一のテキストに前序があると記しているのは、明らかに誤読である。大竹晋「二〇二二」は、前序について考察する段で、

前序の後に「婦命一切諸仏菩薩」を伴う訳経として、毘目智仙共般若流支訳『聖善任意天子所問經』と般若流支訳『正法念所經』とが現存するが、これらはどちらも曇林が参加した訳経である⁴²。

と述べており、恐らくここで大竹氏自身を取り上げた、曇林の参加した二つの經典の構成と、『論疏』にいう第一のテキストの構成とを、どちらにも婦命頌があるという共通点に注意を奪われて、混同してしまったのである。『法華論』の前序については、隋の費長房（六世紀頃）撰『歷代三宝紀』（五九七年成立）巻第九に、「妙法蓮華經論二卷（曇林筆受并製序）」⁴³とあり、流支の筆受を務めていた曇林が作成したものであることがわかる⁴⁴。また第一のテキストには婦敬頌がなく、第二のテキストには前序がないというのは、大竹氏の解釈である。

『論疏』の同箇所に記載されていることだけで纏めると、第一のテキストには前序がなく直ちに「經曰婦命一切諸仏菩薩」（婦命頌）といい、第二のテキストには婦敬頌があるというから、以下のようになる。

・第一のテキスト……前序なし。婦命頌から始まる。

・第二のテキスト……帰敬頌あり。

これに筆者の解釈を加えると、第一のテキストについては、直ちに帰命頌から始まるというので、少なくとも帰命頌の前に帰敬頌は置かれていないのであろう。これは大竹氏の解釈と一致する。一方、第二のテキストについては、『論疏』では前序がないとも言っておらず、或いは前序があるかもしれない。抑も前序がどちらにもないのであれば、「一無前序」と言及する必要もないであろうから、第一のテキストにはないが第二のテキストには前序がある、と筆者は解釈する。これは大竹氏の解釈とは異なる。また第二のテキストの帰命頌の有無については、『論疏』で言及していないため、あるとも言えない。現行本の留支訳では、帰敬頌の後に帰命頌はない。大竹氏は第二のテキストには帰命頌がないと見做して、「第二のテキストが菩提流支訳の現行本に該当する」と断定している。また、金天鶴「二〇二〇」は、第二のテキストには、帰命頌がないものと見ているが、吉蔵は第二のテキストの帰命頌については言及していないので、有無は不明であり、大竹氏の見解も同様であるが、現行本に該当するかどうかは断定できないであろう。⁽⁴⁷⁾

『論疏』の該当箇所の内容について、筆者の解釈を加えて纏めると以下ようになる（括弧内は筆者の解釈）。

- ・第一のテキスト……前序なし（帰敬頌なし）。帰命頌から始まる。
- ・第二のテキスト……帰敬頌あり（前序あり、帰命頌の有無は不明）。

ではどちらも流支（留支）訳である興聖寺本『法華論』は、『論疏』のいう第一・第二のテキストと、どのような対応関係にあるだろうか。院政期写本・鎌倉時代刊本の冒頭箇所の内容を纏めると、以下のようなになる。

・院政期写本（二卷本）……前序なし。帰敬頌なし、「偈頌シリへ」の書入れあり。帰命頌なし、「経曰歸命一

切諸佛菩薩」の書入れあり。

・鎌倉時代刊本（二卷本）……前序なし。帰敬頌あり。帰命頌なし、「経曰」の二字あり。

影印で見た所、同箇所における院政期写本と鎌倉時代刊本との大きな違いは、帰敬頌の有無である。但し院政期写本には、「偈頌シリへ」との書入れがあり、これが何を意味しているのかという問題が残る。

またどちらにも前序がないのは共通している。但し興聖寺一切経本においては、落合俊典「一九九二」に、

（興聖寺一切経本の）『竜樹菩薩伝』と『提婆菩薩伝』などのほうには書写年が残されているので参考となる。
…中略…『馬鳴菩薩伝』だけに奥書を欠いているのは、おそらく卷子本から折本に装丁した時に前後を整えるため断裁したのではないだろうか。⁴⁸

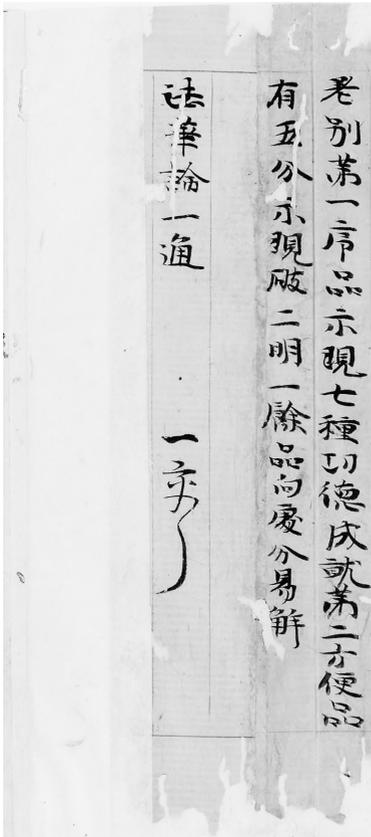
と云うような可能性もあり、『法華論』も断裁されていたとしても不思議ではない。院政期写本では最終行に「法華論一通 一交了」とあり、その次の行以降は、或いは断裁されているように見えなくもない。巻首においても、内題の前に曇林の序文がなかったと言いついては、実際には残っていないので、今は「前序なし」と言うより他ない。

帰命頌については、院政期写本には「経曰歸命一切諸佛菩薩」の書入れがあり、鎌倉時代刊本には「経曰」の二字がある。但し鎌倉時代刊本に見られる「経曰」が、帰命頌とどのような関係にあるのかについては今の所不

明である。

これら両本の冒頭箇所には、いくつかの相違点があるが、主に帰敬頌の有無によって、『論疏』にいう第一・第二のテキストと比較すると、院政期写本は第一のテキストに近く、鎌倉時代刊本は第二のテキストに近い。

以上のように、影印資料によって少しずつ明らかになって来た興聖寺本『法華論』について、筆者は令和二(二〇二〇)年度の日本印度学仏教学会学術大会において少しく研究発表を行い、その内容を『印度学仏教学研究』に寄稿した⁴⁹⁾。拙稿「二〇二二」では、斯界で初めての紹介となる興聖寺本『法華論』の特徴について大略を述べつつ、院政期写本・鎌倉時代刊本の冒頭箇所の内容を検討した。拙稿「二〇二二」は、興聖寺本『法華論』の研究の第一歩となる論文であったが、その次に取り組むべき課題として本文の系統についての検討があった。その後、本稿の執筆までに興聖寺本『法華論』に関する題目で発表を行う機会が二度あり、それらの検討において興聖寺本『法華論』の写本・刊本の系統を明らかにした。これに関しては、次章にて詳しく述べる。



院政期写本の巻末

また同時に、興聖寺本『法華論』の翻刻作業なども進めていたが、そのような中で二〇二一年十一月には、日本古写経研究所の興聖寺一切経実地調査に参加させて頂く貴重な機会を得て、興聖寺本『法華論』を⁵⁰⁾実際に調査することができた。

実際に原本を確認すると、江戸時代に行われた改修の跡が看取でき、特に院政期写本においては裏打ちや改装が施される前から、巻首の紙背に帰敬頌が記されていたことが新たに判明した。紙背の帰敬頌は、元の卷子本から折本に改装された際に、偈頌の一部が表紙の裏に隠れ込んでしまったようであり、残念ながら判読不能な箇所もある。なお判読できる部分は、本稿翻刻篇の注9に翻刻を載せてある。

五 興聖寺本『法華論』の系統

二〇二〇年四月に身延山大学国際日蓮学研究所から刊行された望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』⁵²では、八世紀前半までに成立した『法華論』の末注書『論疏』『述記』『子注』に共通して引用される「経曰帰命一切諸仏菩薩」(帰命頌)を有する『法華論』テキストを古形の流支訳と規定し、この一文を有する江戸期の刊本を善本と判定して、その意義を顕彰している。⁵³この研究書において、金炳坤「二〇二〇B」は、『法華論』の諸テキストの扱い方について再評価を行っており、さらに、金炳坤「二〇二〇C」「二〇二〇D」では、十二種十二種の『法華論』テキストを用いて、序品箇所を諸本校合を行っている。ここでは、金炳坤氏による諸本校合の成果を踏まえて、興聖寺本『法華論』の属性について検討する。金炳坤氏が校合に用いた『法華論』の諸テキストを列挙すると、以下の通りである。⁵⁴

末注書所引流支訳

- (1) 聖語蔵本『子注』(通巻No.1987) 所引の流支訳
- (2) 聖語蔵本『述記』(通巻No.1986) 所引の流支訳

和刻本流支訳

- (3) 正保三（二六四六）年版の流支訳
 - ㊦ 寛永二（二六二五）年版の流支訳
 - (4) 慶安五（二六五二）年版『科註妙法蓮華經論』所引の流支訳
 - (5) 正徳四（二七一四）年版『論疏』補入の流支訳
 - ㊧ 正徳四年版『論疏』の頭注に示される（咸潤が校讎に用いた『法華論』）
 - (6) 智証大師全集本『論記』補入の流支訳
- 摩提訳

- (7) 敦煌本の摩提訳（BD11838/S.2504）
- (8) 『大正蔵』の摩提訳（大正蔵No.1520）
- (9) 『黄檗版』の摩提訳の別本⁵⁵
- 留支訳・両訳混合
- (10) 敦煌本の両訳混合（BD10071/BD07733）
- (11) 『大正蔵』の留支訳の別本⁵⁶（大正蔵No.1519）
- (12) 『黄檗版』の留支訳

金炳坤〔二〇二〇〕は、古蔵『論疏』における古形の流支訳『法華論』からの引用例を挙げ、例えば「論曰下…此法門者…初第一品者…七種皆稱功德者」の引文の内、「七種皆稱功德」の一句は、『論疏』でしか見られず、「逆に『法華論』のその後における様々な展開を窺わせる好例と言えよう」と述べている⁵⁸。では、興聖寺本の該



院政期写本
「七種功徳成就」

当箇所はどのようになっていたであろうか。原文を確認すると以下の通りであった。

院政期写本では「論曰此法門初第一品明七種功徳成就」となっており、諸本と校合してみると、(1)『子注』所引の流支訳、(6)『論記』補入の流支訳に一致する。なお「明」字の右には、「示現イ」との異本注記が付されており、その校合で用いられた異本の原文を再現すると、「論曰此法門初第一品示現七種功徳成就」となる。院政期写本は、同箇所において『論疏』の引用する古形の流支訳とは一致しないが、『子注』所引および『論記』補入の系統の流支訳とは一致していることがわかる。

一方、鎌倉時代刊本では「論曰此経法門初第一品示現七種功徳成就」となっており、諸本と校合してみると、(1)～(12)のいずれとも完全に一致はしないが、(5)『論疏』補入の流支訳の「論曰此経法門中初第一品示現七種功徳成就」に近いことがわかる。また同箇所において「論曰」「示現」の両方の字句を有するテキストは、金炳坤「二〇二〇C」の十四種の校合資料の中では『論疏』補入の流支訳だけに限られるが、先に再現した院政期写本の校合に用いられた異本には、これらの字句が見られる。

興聖寺本においても『論疏』に特有の「七種皆稱功徳」という引文は見られなかったが、同箇所の本文比較からは、院政期写本と鎌倉時代刊本との本文系統の異なることが、一例として確認できる。

また金炳坤「二〇二〇C」では、属性を定める一文とされる「自此已下示現所説法因果相應知」について検討しており、この一文の有無とこれが置かれる位置によって、諸本を次の五種に分類している。

- (イ) 流支訳の古形Ⅱ(3)(5)(6)…序品になく、方便品にある。
- (ロ) 摩提訳Ⅱ(7)(8)…序品になく、方便品にある。
- (ハ) 摩提訳の別本Ⅱ(9)…序品にあり、方便品にもある。
- (ニ) 留支訳の別本Ⅱ(11)…序品にあり、方便品にない。
- (ホ) 留支訳Ⅱ(12)…序品にあり、方便品にない。

興聖寺本について、金炳坤「二〇二〇C」の分類法によって分けると、「自此已下示現所説法因果相應知」の一文を「序品」ではなく、「方便品」に配置する院政期写本は、属性の(イ)流支訳の古形と同じ系統となり、(3)正保三年版の流支訳および(5)『論疏』補入の流支訳と一致する。なお(6)『論記』補入の流支訳は、(イ)に該当するが、原文は「論曰自此下。示現所説法因果相應^レ知^②」となっており、「已」の字を欠くので、院政期写本と完全一致ではない。

落合俊典「一九九二」によれば、興聖寺一切経の中には、「唐仏教の正統な蔵経を転写したもの」^③である古い系統の写本が存しているという。そうすると、古形の流支訳と同系統であることが判明した院政期写本は、奈良朝写経の転写本である可能性が高いであろう。

一方、鎌倉時代刊本は「自此已下示現所説法因果相應知」の一文が、「序品」にあり、「方便品」にない。また、高麗再雕本を底本とする『大正蔵』の留支訳『法華論』などでは見られない、

又依義撰三故。一與説故。如經今佛世尊欲説大法等故。二成如實説故。如經我於過去曾見等故。三令待説故。如經諸人今當知等故。^④

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻(浅野)

の五十二字を欠くことから、属性の（ホ）留支訳と同じ系統となり、（12）『黄檗版』の留支訳と一致する。またその他にも聖語蔵本（通卷ノ。122）や金剛寺本、房山石経の留支（或いは流支）訳とも同じ系統となる。日本古写経系の正倉院聖語蔵・金剛寺一切経や、中国の隋代から刻経が開始された房山石経においては、古い時代の資料をも伝えているが、これらと同系統である鎌倉時代刊本は、或いは『論疏』にいう二種の「古形」の一方と想定できないだろうか。これについての検討は、今後の課題としたい。

六 院政期写本の異本注記

院政期写本の巻末には、「一交了」と校合奥書があり、本文中には異本注記、補入記号、欄外注記、見せ消ちなど、校合の跡が所々に確認できる。ここでは異本注記について検討する。

「〇〇イ」の形で該当箇所の上傍に示される異本注記は、院政期写本の全体で計六箇所あり、本文の順序に沿って、該当箇所のセンテンスを挙げると、以下の通りである（脚注に『大正蔵』の留支訳の該当箇所を示した）。

- ① 「論曰此法門初第一品（注イ）明七種功德成就（65）」
- ② 「八者攝取上下功德（66）」
- ③ 「三攝功德成就者（67）」
- ④ 「方便品（注イ）余時世尊入甚深三昧正念不動（68）」
- ⑤ 「〇へ（注イ）自此已下依三種義示現（69）」

⑥ 「十力諸解脫同共一法中而不得此事⑦」

①の原文は、前述の通り『子注』所引および『論記』補入の『法華論』に一致し、校合に用いた異本の文は、鎌倉時代刊本および『論疏』補入の『法華論』に近い。

②の原文の「下」字は誤字であり、異本の「上」字が正確であることが、諸本との校合からわかる。

③の原文の「三」字は、『子注』や和刻本の諸本に見られ、鎌倉時代刊本・敦煌本・『大正蔵』・『黄檗版』の諸本には見られない。ここは『法華論』の七成就の第三攝功德成就の内容であるため、異本の「四」字が誤字である。

④の箇所は「方便品」の冒頭であるが、写本の原文は、確認し得た諸本の中では『大正蔵』の摩提訳と近く、異本は寛永二年版・正保三年版の流支訳および普寧寺版（元本）の摩提訳に近い。なお鎌倉時代刊本の該当箇所は、品名が「方便品第二」となっており、「第二」の品数を有する。

⑤の箇所には、補入記号と庵点が付されており、二つの異本注記が見られる。しかしながら、確認し得た諸本の中では、同箇所に「論曰」「釈曰」を有するテキストは見当たらない。写本の原文は、鎌倉時代刊本および『大正蔵』の摩提訳の諸校本（宋本・元本・明本・宮本）と一致し、寛永二年版・正保三年版の流支訳および『大正蔵』の留支訳などとは異なる。

⑥の原文は、諸本との校合から、偈頌の一句に当たる五字が脱落していると考えられ、補入記号の右に記される異本注記の「同共一法中」を有する諸テキストが本来の整った形であろう。

院政期写本の校合では、系統の異なる本が用いられていたことが、異本注記の内容から確認された。用例③④⑤の異本注記の内容は、鎌倉時代刊本の原文とは一致しないため、同箇所においては鎌倉時代刊本が校合に用い

られていないことが断定できる。異本注記からは、異本によって底本の誤脱を改めようという校合者の意図が看取できるが、一方で、用例③のように異本注記の内容の方が明らかに間違っている場合や、その異本に特有の他には見られない異文情報を示している場合なども確認された。

七 おわりに

本稿の検討によって、興聖寺蔵『法華論』の院政期写本・鎌倉時代刊本のテキスト系統が明らかになった。「自此已下示現所説法因果相應知」の配置から、院政期写本は江戸期の和刻本などが属する古形の流支訳と同系統であり、鎌倉時代刊本は、聖語蔵本〔2018A〕や金剛寺本、房山石経、『黄檗版』などの留支（流支）訳と同系統であることがわかった。古い本文内容を留めており、またそれ自体が古い時代の写本・刊本である興聖寺本『法華論』は、奈良・平安朝以降の『法華論』テキスト流伝における展開を考える上で、極めて大きな意義を有する資料である。

また古形の流支訳『法華論』の全文を引くとされる『子注』^①は、半分ほどが散逸のため、これだけでは古形の復元が難しかったが、本稿で興聖寺本『法華論』の系統が証明できたことによって、金炳坤〔二〇二〇B〕〔二〇二〇C〕において今後の課題とされていた、古形の流支訳『法華論』の復元が可能になったといえよう。^②

『論疏』に云う『法華論』の第一のテキスト・第二のテキストとの関係で観ると、主に帰敬頌の有無からは、院政期写本は第一のテキストに近く、鎌倉時代刊本は第二のテキストに近い。また『論疏』にいう第一のテキスト・第二のテキストは、言い換えればどちらも系統の異なる「古形」であるから、興聖寺蔵の院政期写本は「自此…応知」の配置によって第一の古形の系統であるとして、正倉院聖語蔵・金剛寺一切経・房山石経などの非常

に古い資料をも伝えている蔵経系の『法華論』と、部分的にはあるが一致点が確認された鎌倉時代刊本は、或いは第二の古形の系統である可能性も残っている。しかしながら、これについては更なる検討が必要であろう。本稿で実施した興聖寺本『法華論』の全文翻刻に基づいた、諸本校合などによる更に詳しい検証については、後日を期したい。

【附記】

筆者は令和三（二〇二二）年十二月二十日～二十三日の四日間に亘って、落合俊典所長率いる日本古写経研究所の七寺一切経実地調査に参加させて頂き、七寺蔵『法華論』の計二点の写本を初めて拝見した。一点は菩提留支訳『妙法蓮華経優婆提舍』一巻本で、もう一点は欠損により内題が存しないが、帰敬頌が確認できるもので、尾題には「妙法蓮華経憂婆提舍卷上」とあり、上下二巻本の卷上と見られる。帰敬頌、帰命頌、「自此…応知」の有無と配置を確認した所、一巻本は古形の流支訳と同系統であり、二巻本の卷上と見られるものは、金剛寺本等と同系統であることがわかった。

さらに、令和（二〇二二）四年一月二十日には、国際仏教学大学院大学において、（当時金炳坤氏が未見と仰られており、筆者も未見であった）聖語蔵本の菩提流支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』一巻本（通巻No. 355）および、菩提流支訳『妙法蓮華経優婆提舍論』一巻本（通巻No. 356）の本文内容を確認することができ、これらはどちらも古形の流支訳と同系統であることがわかった。なおこれらの聖語蔵本・七寺本にも、曇林の前序は見られなかった。

幸いにも筆者の許に続々と集まって来た、これらの貴重な日本古写経本『法華論』テキストを用いて、いずれ校訂テキストを作成する心算である。

七寺一切経本などのデジタル画像の閲覧に際しては、国際仏教学大学院大学附置日本古写経研究所の前島信也研究員の御助力を賜った。この場をお借りして感謝の意を表したい。

注

- (1) 本稿は、拙稿「二〇二二」^①「二〇二二」および本稿注50^③④の発表資料に、増補を施した改訂版である。
 - (2) 『調査報告書』一四八頁。
 - (3) 拙稿「二〇二二」^①「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』について」(『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号、八八～九二頁)。
 - (4) 岡本一平「二〇二二」の付記(三七頁～三八頁)において、拙稿「二〇二二」に対する何点かの指摘があった。初めに、拙稿を取り上げて下さった岡本一平先生に、感謝の意を表する次第である。岡本付記では、「浅野論文は、金炳坤論文と桑名法見論文の成果を参照しているが、参照の仕方として残念ながら問題が残る」として五つの問題点を挙げている。それらの問題点について回答したい。
- まず前提として、拙稿「二〇二二」における望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』(以下、同研究書)所収論文の参照は、『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号に寄稿する時点までに読み得た範囲内での参照であり、また同研究書を入手して間もなかったこともあり、部分的な参照であった。それから、拙稿「二〇二二」は、斯界で初めて興聖寺本『法華論』を紹介するという点が目撃であった、その後続く研究の第一歩としての論文である。
- 岡本付記に云う第一の問題点については、ここで筆者の意図した事は、興聖寺蔵の写本『法華論』が、その本文内容や興聖寺一切経の全体的な特徴から、恐らく奈良朝写経の転写本と思われるため、宋代から始まる刊本大蔵経よりも古い唐代の写本大蔵経の系統に当たると推測される。また、大蔵経に「入蔵している」という基準

からすれば、「權威」も「正統」もどちらもいえるのではないだろうか。第二の問題点については、どのような問題であるのか筆者にはよくわからないが、筆者は唐代の写本大藏經の系統として興聖寺写本を想定しているので、開宝藏以降の刊本大藏經についてここではあまり関係がないように思う。第三の問題点については、冒頭箇所だけでは判定できず、拙稿「二〇二二」でも系統を断定していない。なお冒頭箇所以外をも検討した本稿では、興聖寺写本が『妙法蓮華經論子注』や江戸期の和刻本と同系統であることを明らかにした。第四の問題点については、研究段階に応じて個別に検討することは勿論必要であろう。一方で、『法華論』においては系統が異なるとはいっても大同小異であって、一緒に扱うことは困難ではないし、むしろ個別に検討するよりも比較を通してわかることも多い。第五の問題点については、筆者の書き方に不備があったが、拙稿「二〇二二」の注(6)にある『調査報告書』(一四八頁)には書写・刊行年代の根拠が示されており、また『調査報告書』付篇の上島享編「興聖寺一切經編年表」(以下、「編年表」)によって、『法華論』写本も院政期の書写であることが想定される。

本稿では、興聖寺本『法華論』の位置付けを行っており、その結果、本資料の意義の大きさが改めて確認された。詳しくは、本稿の第五項「興聖寺本『法華論』の系統」を参照されたい。

(5) 『調査報告書』二頁。

(6) 大山喬平「西樂寺一切經書写の在地環境について」(『調査報告書』四一七頁)

(7) 『調査報告書』三頁。

興聖寺一切經の悉皆調査は、京都府教育委員会によって平成六年度から平成九年度にかけて実施され、その調査結果が平成十年三月発行の『調査報告書』に纏められている。

(8) 川端新「海住山寺の歴史」(『調査報告書』四四〇頁)

(9) 石川登志雄「興聖寺と一切經」(『調査報告書』四四四頁)

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻(浅野)

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻（浅野）

二四

- (10) 佐藤禮子「二〇一四」一三頁。
- (11) 石井修道「一九七九」七八頁。拙稿「二〇一九」三二一―三二二頁。
- (12) テキストによって、「菩提流支」とする場合と、「菩提留支」とする場合とがある。『大正蔵』第二十六卷の目次では「菩提流支」と記しているが、その本文テキストでは、「菩提留支」（一頁上、五頁中）と記しており、表記ゆれがある。本稿では、特定のテキストの訳者名を指す文脈においては「流支」と「留支」とを区別するが、ただ人物を指す場合には「流支」の表記を用いる。大正蔵本について言う文脈では、本文の表記に拠って「留支」を用いる。
- (13) 大正蔵本の両訳は、思溪蔵・普寧寺蔵・嘉興蔵・宮内省図書寮蔵の福州版と校合が行われており、校異を脚注に載せている。
- (14) 『大正蔵』第五十五卷、五四〇頁中。
- (15) 『大正蔵』第五十五卷、五四一頁上。
- (16) 伊藤瑞毅「一九八三」は、「流支訳法華論は摩提訳法華論と殆んど同様であり、摩提訳の極めて瑣末な諸点の重訂であるから、流支訳とはいっても事実の上で大部分は摩提訳の踏襲である。殆んどが摩提訳の踏襲である流支訳ははたして通称の如く流支訳と云えるのであろうか。実質的には摩提主訳流支重訂というべきであらう」（一二三頁）と分析している。
- 大竹晋「二〇一一」は、「率直に言つて、筆者は菩提流支訳を、菩提流支が梵文に基づいて行なつた翻訳でなく、中国人が梵文を見ないまま勒那摩提訳をいじつた代物でないかと考えている。中国人は勒那摩提の梵文直訳体の生硬さを嫌い、流暢な漢文に書き換えようとしたが、梵文を見なかつたゆえに、梵文の原意と異なる意味になってしまったのであるらうか。…中略…今は、菩提流支訳が勒那摩提訳の稚拙な改訂版であることのみを指摘し、学術的には勒那摩提訳を用いるべきであることを提言するにとどめる」（一二三頁）と述べており、勒那摩提訳を再評価している。

- (17) 留支訳について、『開元録』巻第六に「法華經論二卷（題云妙法蓮華經優波提舍或一卷曇林筆受並製序第二出與前寶意出者同本初有歸敬頌者是見續高僧傳）…中略…沙門菩提留支。魏言道希。北印度人也」（『大正藏』第五十五卷、五四一頁中～下）とある。
- (18) 金炳坤「二〇二〇B」は、「中国の宋元明清版、日本の『天海』『黄檗』には帰敬頌を有する後者（摩提訳）の別本が収録されている」（三頁）と述べており、「摩提訳の別本とは、帰敬偈を有する二巻本のこと」（五頁）であるとして、摩提訳を二種類に分けている。
- (19) 摩提訳について、『開元釈教録』に「妙法蓮華經論一卷（婆數盤豆菩薩造亦云法華經論侍中崔光僧朗等筆受見長房録初出與菩提留支譯者大同小異題云妙法蓮華經優波提舍）…中略…沙門勒那摩提。或云婆提。魏言寶意。中印度人」（『大正藏』第五十五卷、五四〇頁中）とある。
- (20) 『開元録』巻第九に、「法華論五卷（莫知造者單重末悉景雲二年譯）集量論四卷（景雲二年譯已上多取奏行年月所以出日名同）右六十一部二百三十九卷（法華論下二部九卷失本）沙門釋義淨。齊州人。俗姓張字文明」（『大正藏』第五十五卷、五六八頁中）とある。
- (21) 望月海慧「二〇二〇A」六頁、および同頁の注⑤（川崎英真『DKar chag'Phang thang ma』東北インド・チベット研究会、二〇〇五）注⑥（Kurtis R. Schaeffer and Leonard W. J. van der Kuip, *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature: The bsTan pa rgyvas pa rgyan gyi nyid of bCom ldan ral gri*. Cambridge: Harvard University Press, 2009, p. 156.）を参照。
- (22) 同上七頁。
- (23) 望月海慧「二〇二〇B」二一〇頁。
- (24) 同上。

興聖寺一切経本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（浅野）

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』 解題・翻刻（浅野）

- (25) 『調査報告書』一四八頁。
- (26) 同上。
- (27) 『調査報告書』四五九頁。
- (28) 『調査報告書』四六〇～四七七頁。
- (29) 『調査報告書』五一〇頁。
円照（八世紀頃）撰『貞元録』卷第二十九入蔵録上には、「妙法蓮華経論一卷（題云妙法蓮花経優婆提舍）…中略…法華経論二卷（初有歸敬頌者是或一卷亦云妙法蓮花経優婆提舍）」（『大正蔵』第五十五卷、一〇三七頁中）とある。
- (30) 『八種目錄』一四七頁。「日本古写経データベース」<https://koshakyo-database.icabs.ac.jp>（参照：二〇二二年二月二日）
- (31) 佐々木勇「二〇一八」六四頁参照。
なお拙稿「二〇二二」八八頁～九一頁では、同箇所を「ヒリへ」と誤読していたが、正確には「シリへ」であった。
ご教示下さった同学の先輩新田優氏に感謝の意を表する次第である。
- (32) 塚本善隆「一九七四」七六頁、鎌田茂雄「一九八四」三三七頁を参照。
- (33) 金炳坤「二〇二〇B」は、「系統を分類し得る要文こそこの一文になるのである。ひいてはその年代からして、この一文を有するテキストこそが流支訳『法華論』の古形と規定され得るのである」（八頁）と述べている。
- (34) 『大正蔵』第五十五卷、一〇三七頁中。
- (35) 『調査報告書』五一〇頁。
『貞元録』卷第二十九入蔵録上には「妙法蓮華経論一卷（題云妙法蓮花経優婆提舍）…中略…法華経論二卷（初有歸敬頌者是或一卷亦云妙法蓮花経優婆提舍）」（『大正蔵』第五十五卷、一〇三七頁中）とある。
- (36) 同上。

(37) 大竹晋「二〇一二」一〇八頁から取意引用。

(38) 大竹晋「二〇一二」一〇八頁から引用。

(39) 中井本勝「二〇二六」校訂テキストの一七〇頁から引用。なお句読点を私に付加した。

(40) 大竹晋「二〇一二」一〇九頁から取意引用。

(41) 『大正蔵』第四十卷、七八五頁中。

(42) 大竹晋「二〇一二」一〇九頁。

(43) 『大正蔵』第四十九卷、八六頁上。

(44) 桑名法晃「二〇二〇」では、『法華論』の諸テキストにおける冒頭の構成について表で示しており、その項目中に曇林が作成したとされる序を、「I前序」として立てている。この表に拠ると、前序について言及するテキストは確認されていない。

(45) 『大正蔵』第四十卷、七八五頁中。

(46) 大竹晋「二〇一二」一〇九頁。

(47) 金天鶴「二〇二〇」一〇頁。

(48) 落合俊典「一九九二」二九五頁～二九六頁。

(49) ①発表「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』について」(日本印度学仏教学会第七十一回学術大会、令和二年七月五日、於創価大学 オンラインリモート会議システム)
②拙稿「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』について」(『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号、八八頁～九一頁、令和三年三月二十五日)

(50) ③発表「興聖寺本『妙法蓮華経憂波提舍』の文献学的検討」(令和三年度第一回法華経文化研究所研究員研究生研究

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻(浅野)

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻（浅野）

二六

会、令和三年七月二十八日、於立正大学 オンラインリモート会議システム）

(4) 発表「興聖寺本『妙法蓮華経憂波提舍』の属性について」（第七十三回日蓮宗教学研究発表大会、令和三年十一月十三日、於身延山大学 オンラインリモート会議システム）

(51) 筆者は、二〇二一年十一月二十日から二十三日までの四日間にかけて、落合俊典所長率いる日本古写経研究所の興聖寺一切経実地調査に参加させて頂いた。ここに記し、感謝の意を表する次第である。

(52) 令和二年度の日本印度学仏教学会第七十一回学術大会における、筆者発表の質疑応答では、望月海慧先生から『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』が発刊されたことをご教示頂き、『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号に寄稿する際には、その時点までに読み得た範囲（増補版論文の一部を確認・参照）で反映することができた。ここに記し、感謝の意を表する次第である。金炳坤先生には、拙稿「二〇二一」の刊行後にご連絡を頂き、『法華論』の文献学的研究を進めていく上でのアドバイスを、数多くの研究資料を賜った。ここに記し、御厚意に謝意を表したい。

(53) 金炳坤「二〇二〇E」i～vi。

(54) 金炳坤「二〇二〇C」一八頁～二三頁。

金炳坤氏の選定による計十四本のテキストの順序は、工夫が凝らされており分析に便利な構成となっている。

(55) 本稿注（18）参照。

(56) 金炳坤「二〇二〇C」一一〇頁。

(57) 『大正蔵』第四十卷、七八七頁上。

(58) 金炳坤「二〇二〇B」一〇頁。

(59) 金炳坤「二〇二〇C」三三頁。

(60) 金炳坤「二〇二〇C」一一一頁～一一二頁。

(61) 金炳坤 [「二〇二〇C」] では、八世紀頃までの流布本の系統を「流支訳」、十世紀以降の藏經本の系統を「留支訳」と区別して表記している。

(62) 『智証大師全集』上巻、一一八頁下。

(63) 落合俊典 [「一九九二」二九八頁。

(64) 『大正藏』第二十六卷、四頁中。

(65) 「釋曰。此經法門。初第一品示現七種功德成就」(『大正藏』第二十六卷、一頁上〜中)

(66) 「八者攝取上上功德」(『大正藏』第二十六卷、二頁上)

(67) 「攝功德成就者」(『大正藏』第二十六卷、二頁下)

(68) 「方便品第二／經曰。爾時世尊入甚深三昧正念不動」(『大正藏』第二十六卷、四頁中)

(69) 「自此已下依次示現三種義說」(『大正藏』第二十六卷、六頁中)

(70) 「十力諸解脱 同共一法中 而不得此事」(『大正藏』第二十六卷、八頁上)

(71) 金炳坤 [「二〇二〇B」] 九頁。

(72) 金炳坤 [「二〇二〇B」] 一二頁。[「二〇二〇C」] 一二三頁。

【凡例】

- 一 本翻刻は、興聖寺蔵の菩提流支訳『妙法蓮華経憂波提舍』一卷（院政期写本）を底本とするものである。
 - 二 校本には、興聖寺蔵の菩提留支訳『妙法蓮華経優波提舍』二卷（鎌倉時代刊本）と、『大正蔵』所収の留支訳およびその校注（宋本・元本・明本・宮内庁本）を用いて、底本との異同を注記した。
 - ① 校本の略譜は、興聖寺蔵鎌倉時代刊本【鎌】、大正蔵本【大】、宋本【宋】、元本【元】、明本【明】、宮内庁本【宮】とした。
 - ② 『大正蔵』に校注のある箇所、大正蔵本のみ諸本と一致しない場合に限り、【大】^{※別}と表記した。
 - ③ 校注で【鎌】と【大】との内容が一致する場合は、鎌倉時代刊本が用いる字体によって表記した。
 - ④ 校本の鎌倉時代刊本には、欠損箇所が全体で計四字分ある。それらの欠損箇所について、院政期写本で対応する箇所を網かけで示した。
- 例・260 无數方便引道衆生於諸著處令得解脫。舍
- 三 翻刻に当たっては、以下の方針に基づいた。
- ① 改行は底本に従った。
 - ② 各紙の一行目の行末に丁付を（ ）で示した。
 - ③ 各行頭に行番号を付した。

④ 漢字は、原則として原文どおりの字体を用いることに努めたが、入力が困難な異体字・難字などは最も近い字体を用いた場合もある。

⑤ 以下の例のように、底本で統一されていない異体字は、原文どおりに翻刻した。

例・与・與、樂・樂、因・回、最・叡、句・勾、障・鄣、坐・坐、色・色、色・色、異・昇、世・屯、第・才、惣・捨、
发・發

⑥ 仏教省文章体・略字・俗字は、原文どおりに翻刻した。

⑦ 誤写・誤刻・衍字と認められる箇所でも、原文どおりに翻刻した。また適宜、原文の儘を意味する（ママ）を該当箇所の右傍に付した。

⑧ 句読点、中黒点を私に付した。

⑨ 底本の挿入符は、○で示した。

⑩ 判読不能な箇所は、□で示した。

⑪ 判読不能な誤写や難読字は、右に*を付した（ ）で示し、（ ）内には、底本の注記や校合などによって予想される字を補った。

例・103衆生故。四者攝取智方便、以教化衆生（令）入

⑫ 破損等があっても判読可能な場合は、該当字を□で囲んだ。

⑬ 底本の（第六紙から第十五紙に見られる）朱書・墨書による庵点は、全てへで示した。

⑭ 底本の（第十紙から第十三紙に見られる）中黒点は、私に付した句読点と重複するため削除した。

四 興聖寺本の書誌は以下の通りである。なお記述に当たっては、『興聖寺一切経調査報告書』第一章目録篇の

一四八頁と、二〇二一年十一月二十日から二十三日にかけて行われた、興聖寺一切経実地調査にて筆者が作成し得た調査の情報を基にした。

院政期写本

〔外題〕法華論一通（題僉あり）

〔状態〕良好
〔紙質〕楮紙

〔内題〕妙法蓮華経憂波提舍

〔紙色〕染紙丁子

〔尾題〕法華論一通

〔第二紙〕一紙三十行十八字

〔撰者〕婆藪槃豆菩薩造

縦二十四糵五耗 横五十四糵三耗

〔訳者〕照玄沙門都三蔵法師菩提流支譯

界高十九糵七耗 界幅一糵八耗

〔刊写〕写本

天界二糵八耗 地界二糵一耗

〔装丁〕折本

〔法量〕第一紙から第二十三紙は、五十二糵四耗―六

〔時代〕平安時代院政期

十四糵七耗の間。第二十三紙は、四糵三耗。

〔箱番号〕二百三十四

全二十三紙

〔千字文〕璧

〔奥書〕一交了

〔裏打ち〕全部

〔備考〕紙本墨書。裏打紙に黒文方印（第八紙裏に一

〔表紙〕有 縦二十四糵七耗 横九糵一耗

箇所と第十八紙裏に二箇所計三箇所）あり。

〔見返し〕後補

墨書による校合。表紙題僉の外題下に「往」

〔界線〕墨界

と朱筆あり。表紙中央に「妙法レンケ経論

〔存欠〕完

憂波提舍」と朱筆あり。第一紙冒頭の上方

欄外に「圓通山興聖寺」の印記あり。

鎌倉時代刊本 卷上

〔外題〕 妙法蓮華經優波提舍卷上 (題僉あり)

〔内題〕 妙法蓮華經優波提舍卷上

〔尾題〕 妙法蓮華經優波提舍卷上

〔撰者〕 婆藪槃豆菩薩造

〔訳者〕 三藏法師菩提留支譯

〔刊写〕 刊本

〔装丁〕 折本

〔時代〕 鎌倉時代

〔箱番号〕 二百三十五

〔千字文〕 非

〔裏打ち〕 全部

〔表紙〕 有

〔見返し〕 後補

〔界線〕 墨界

〔存欠〕 完

〔状態〕 良好

〔紙質〕 楮紙

〔紙色〕 染紙丁子

〔第二紙〕 一紙二十二行十七字

〔法量〕 縦二十五糎八耗 横十糎三耗 界高二十一糎

九耗 界幅一糎九耗 全十八紙

〔奥書〕 無

〔備考〕 表紙題僉の下に「往」と朱筆あり。裏打紙に

黒文方印あり。第一紙冒頭の上方欄外に「圓

通山興聖寺」の印記あり。

鎌倉時代刊本 卷下

〔外題〕 妙法蓮華經優波提舍卷下 (題僉あり)

〔内題〕 妙法蓮華經優波提舍卷下

〔尾題〕 妙法蓮華經優波提舍卷下

〔撰者〕 婆藪槃豆菩薩造

〔訳者〕 三藏法師菩提留支譯

〔刊写〕 刊本

〔装丁〕 折本

〔時代〕鎌倉時代

〔紙質〕楮紙

〔箱番号〕二百三十五

〔紙色〕染紙丁子

〔千字文〕非

〔第二紙〕一紙二十行十七字

〔裏打ち〕全部

〔法量〕縦二十六糎 横十糎三耗 界高二十二糎 界

〔表紙〕有

幅一糎九耗 全二十一紙

〔見返し〕後補

〔奥書〕無

〔界線〕墨界

〔備考〕裏打紙に黒文方印あり。第一紙冒頭の上方向

〔存欠〕完

外に「圓通山興聖寺」の印記あり。

〔状態〕良好

【翻刻】

- 1 妙法蓮華經憂波提舍婆數槃豆菩薩造⁴ (第一紙)
- 2 照玄沙門都三藏法師菩提流支譯^{7,8}
- 3 〇 如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中、与大⁹
- 4 比丘衆万二千人俱、皆是阿羅漢、諸漏已盡、无復¹⁰
- 5 煩惱、心得自在、善得心解脫・善得惠解脫、心善¹¹
- 6 調伏、人中大龍、應作者作、所作已弁、離諸重擔、¹²
- 7 速得已利、盡諸有結、善得正智、心解脫、一切心得¹³
- 8 自在、到第一彼垢。菩薩摩訶薩八万人、皆於阿耨多¹⁴
- 9 羅三藐三菩提不退轉、皆得陀羅尼・大弁才樂說、¹⁵
- 10 轉不退法輪、供養无量百千諸佛、於諸佛所種諸¹⁶
- 11 善根、常為諸佛之所稱嘆、以大慈悲而脩身心、¹⁷
- 12 善入佛通達大智到於彼垢、名稱普聞无量¹⁸
- 13 世界、能度无數百千衆生。論曰、此法門初第一¹⁹
- 14 品、明七種功德成就。何等为七。一者序分成就。二²⁰
- 15 者衆成就。三者如來欲說法時至成就。四者所依²¹
- 16 說法隨順威儀住成就。五者依止説回成就。六者²²
- 17 大衆欲聞法現前成就。七者文殊師利菩薩成就。²³
- 18 説法隨順威儀住成就。五者依止説回成就。六者
- 19 大衆欲聞法現前成就。七者文殊師利菩薩成就。
- 20 依止
- 21 隨順威儀
- 22 威儀隨順
- 23 欲聞法
- 24 現前
- 25 欲聞法
- 26 現前
- 27 欲聞法
- 28 現前

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻(淺野)

1 憂¹優²鎌³三⁴宮⁵ 2 (卷上+鎌⁶)⁷ 3
 (大乘論師)⁴ + (大) 4 菩薩造⁵釋⁶ [大] 5 照玄沙門都
⁶後魏北天竺 [大]、元魏北天竺 [三] [宮] 6
 [大] 7 流⁸留⁹鎌¹⁰ [大] 8 (共沙門曇林等)⁹ + (大)
 9 補入記号の右に「揭頌シリへ」〇經曰歸命一切諸佛菩
 薩とある。冒頭部分の紙背には扇敬頌が記されているが、
 その上から裏打ちが施されているため不鮮明である。また改
 装によって表紙裏に隠れ込んでしまっている部分は、判読困
 難である。紙背の翻刻は以下の通り。

1 頂礼正覺海 淨法无為僧 為深利智者 開示毗伽典
 2 祇陵牟丘尊 及菩薩聲聞 今法自利他 略出勸伽論
 3 歸命⁴ 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
 4 (不明)

校注 1 毗²毘³毘⁴ [大] 2 祇³折⁴三⁵ [宮] 3
 利他⁴ 他利 [大] 4 論⁵辯 [大] 5 (過未世)⁶ +
 [大]、(過去來)⁷ + (明) 6 (現在佛菩薩) + (大) 7
 (大悲止四魔 護善提增長) + (大)

10 (妙法蓮華經序品第一/經曰) + (鎌)、(妙法蓮華經序品
 第二) + (大)、(序品第二) + (明) 11 住¹²在¹³在¹⁴ [明] 12 已
 已¹⁵已¹⁶已¹⁷ [大] 13 惠¹⁴慧¹⁵ [鎌] 14 已¹⁵弁¹⁶已¹⁷ [大]、
 已¹⁸辦 [大] 15 已¹⁶已¹⁷ [大] 16 弁¹⁷辨¹⁸ [鎌]、[大]、
 17 (轉) + (鎌) [大] 18 嘆¹⁹歎²⁰ [鎌] [大] 19 脩²⁰修²¹
 [鎌] [大] 20 (慧) + (鎌) [大] 21 論²²釋 [大] 22
 (經) + (鎌) [大] 23 明²⁴示²⁵現 [鎌] [大] (明)の右に
 「示現イ」と異本注記あり。 24 (此義應知) + (大) 25 所
 依²⁶依²⁷所 [大] 26 隨順威儀²⁷威儀隨順 [大] 27 欲聞法
 現前²⁸現前欲聞法 [鎌] [大] 28 (菩薩) + (鎌) [大]

- 18 又序分成就者、此法門中示現二種勝義成就、³⁰
- 19 應知。何等為二。一者○現一切諸法門中寂勝義成就故。³²
- 20 二者示現自在功德義成就故。³³如王舍城義勝於諸餘一切城舍故、³⁵耆闍崛山勝餘諸山故、³⁷顯此法門寂勝義故。如經、佛住王舍城耆闍崛山中故。衆成就者、有四種義、成就應知。
- 23 何等為四種。⁴¹一者數成就。二者行成就。三者攝功德成就。四者威儀如法住成就。數成就者、謂大衆無數故。⁴³○行成就者有四種。一者諸聲聞修小乘行。二者諸菩薩脩大乘行。三者諸菩薩神通自在隨時示現、能脩諸行、⁴⁷如毘陀波羅⁴⁸十六人、具足菩薩不可思議事、⁵²而能示現種種形相、謂優婆塞・優婆夷・比丘・比丘尼等故。⁵³四者出家耳耳人威儀一定、不同菩薩故。皆是阿羅漢等者、十六句、示現耳耳功德成就故。⁶⁰皆不退轉阿耨多羅三藐三菩提等者、十三句、示現菩薩功德成就故。⁶³
- 34 阿羅漢功德成就者、彼十六句示現三種門攝義。⁶⁴
- 35 應知。何等三種門。一者上上起門。二者捨別相門。三者攝最事門。⁶⁷上上起門者、謂諸漏已盡故、名為⁶⁸

29 〔又〕一〔大〕 30 〔此義〕十〔鎌〕〔大〕 31 現一切示現一切〔鎌〕、示現〔大〕補入記号の右に「示」とあり。
 32 〔故〕一〔鎌〕〔大〕 33 〔故〕一〔鎌〕〔大〕 34 〔義〕一〔鎌〕〔大〕 35 諸餘一切一切諸餘〔大〕 36 〔故〕一〔鎌〕〔大〕 37 〔故〕一〔鎌〕〔大〕 38 佛婆伽婆〔大〕 39 〔故〕十〔大〕 40 〔示現〕十〔大〕 41 〔種〕一〔鎌〕〔大〕 42 謂諸〔大〕 43 補入記号の右に「二」とあり。
 44 〔謂〕十〔大〕 45 〔謂〕十〔大〕 46 〔謂〕十〔大〕 47 脩諸修〔鎌〕〔大〕 48 〔大乘〕十〔鎌〕〔大〕 49 波婆〔鎌〕 50 〔菩薩〕十〔大〕 51 人賢士〔鎌〕、大賢士〔大〕 〔人〕の右に傍線、下方欄外に「賢士」とあり。 52 能常
 〔鎌〕〔大〕 53 〔故〕一〔大〕 54 〔謂〕十〔大〕 55 耳耳
 〔有〕十〔大〕 59 耳耳聲聞〔鎌〕〔大〕 60 〔故〕一
 〔大〕 61 不退轉阿耨多羅三藐三菩提於阿耨多羅三藐三菩提不退轉〔鎌〕〔大〕 倒置符なし。 62 者有〔大〕 63 〔故〕一〔大〕 64 阿羅漢聲聞〔大〕 65 示現三種門攝義三門攝義示現〔大〕 66 〔種〕一〔鎌〕〔大〕 67 最取〔鎌〕〔大〕 68 〔阿〕十〔鎌〕〔大〕

- 37 羅漢。以心得自在故、名諸漏已盡。以无煩惱故、名⁶⁹心得自在。以遠離能見故、名无復煩惱。以善得⁷⁰心解脫・惠解脫故、名善調伏。人中大龍者、行諸惡道如平坦路无所拘導。應行者已行、應到處⁷¹已倒故。應作者作、人中大龍已對治降伏煩惱⁷²敵故。所作已弁者、更不後生、如相應事已成就⁷³故。離諸重擔者、已應作者作・所作已弁、後生重擔已捨故。速得已利者、已捨重擔、證涅槃故。盡諸有結者、已速得、斷諸煩惱因故。善得正智心解脫者、諸漏已盡故。一切心得自在者、善知見道脩⁷⁴道智故。到第一彼垢者、善得正智心得解脫・善⁷⁵得神通无諍三昧等諸功德故。大羅漢者、心得自在到彼垢故。衆所知識者、諸王・王子・大臣・人良・帝尺・梵天王等皆知識故。復耳耳・并⁷⁶佛⁷⁷等是勝智者、彼勝智者皆善知、故名衆所知⁷⁸識。惣別相門者、是羅漢等十六句。初句是惣、餘句別故。皆是羅漢者彼羅漢、有十五種應義⁷⁹應知。一者應受飲食卧具供養恭敬等故。二者應將大衆教化一切故。三者應入聚落城邑

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（淺野）

69 (為) + 鎌 [大] 70 (復) + 鎌 [大] 71 (為) + 鎌 [大] 72 (善得心解脫善得意解脫故名為心得自在以) + 鎌 [大] 73 (所見) + 鎌 [大] 74 (為) + 鎌 [大] 75 惠 || 善得意 [鎌] [大] 76 (為心) + 鎌 [大] 77 例 || 到 [鎌] [大] 78 (得) + 鎌 [大] 79 恐 || 怨 [鎌]、之怨 [大] 80 弁 || 辨 [鎌]、辦 [大] 81 已 || 以 [大] 82 弁 || 辨 [鎌]、辦 [大] 83 (離) + 鎌 [大] 84 已 || 以 [大] 85 (已利) + [鎌] [大] 86 知 || 過 [鎌] 87 脩 || 修 [鎌] [大] 88 (得) 一 [鎌] [大] 89 羅漢 || 阿羅漢寺 [鎌] [大] 90 (天王) + 大] 91 知識 || 識知 [鎌] [大] 92 (又) + [鎌] [大] 93 耳耳 || 聲聞 [鎌] [大] 94 并 || 菩薩 [鎌] [大] 95 (悉) + [大] 96 故名 || 是故名為 [大] 97 是 || 皆是阿 [鎌] [大] 98 皆是羅漢者彼羅漢 || 彼阿羅漢名之為應 [鎌] [大] 99 (何寺十五) + [鎌] [大]

- 56 尋故。四者應降伏諸外道尋故。五者應以智
57 惠速觀察諸法故。六者應不疾不遲說法如
58 法相應不疲倦故。七者應靜坐空閑處、飲食
59 衣服一切資生不積不聚、少欲知足故。八者應（第三紙）
60 一向行善得、不着諸禪故。九者應行空₁₀₂行故。十
61 者應行无相聖行故。十一者應行无願聖行故。
62 十二者應降伏世間禪淨心故。十三者應起諸通
63 勝功德故。十四者應證第一義勝功德故。十五者
64 應如實知同生衆生得諸功德、為利益一切諸衆
65 生故。攝取事門者、此十五句攝取十種功德應
66 知、示現可說果・不可說果故。何尋為十。一者攝
67 取功德二句示現、如經、諸漏已盡无復煩惱故。二
68 者三句攝取諸功德。一句降伏世間功德、如經、心得
69 自在故。二句降伏出世間學人功德、如經、善得
70 心解脫・善得惠解脫故。三者攝取不違功德、隨
71 順如來教行故、如經、心善調伏故。四者攝取勝功
72 德、如經、人中大龍故。五者攝取所應₁₀₉作勝功德、所
73 應作者謂依法供養恭敬尊重如來故、如經、應
74 作者作故。六者攝取滿足功德、滿足學地₁₁₁故、如

100 惠₁₀₀ 慧₁₀₀ 鑑₁₀₀ 大₁₀₀ 101 諸₁₀₁ 一₁₀₁ 大₁₀₁ 102 得₁₀₂ 行
【鑑】大₁₀₃ 淨₁₀₃ 靜₁₀₃ 明₁₀₃ 104 衆生₁₀₄ 諸衆₁₀₄ 大₁₀₄ 105
【德】大₁₀₆、【得】大₁₀₆ 三₁₀₆ 106 「句」の右に見せ消ち
記号、上方欄外に「句」とあり。107 惠₁₀₇ 慧₁₀₇ 鑑₁₀₇ 大₁₀₇
108 行₁₀₈ 作₁₀₈ 大₁₀₈ 宮₁₀₈ 109 能₁₀₉ 大₁₀₉ 鑑₁₀₉ 大₁₀₉ 110 故₁₁₀ 一
【大】 111 補入記号の右に「力」とあり。

- 75 經、所作已弁故¹¹²。七者三句攝取過功德。一者過愛
 故¹¹³。二者過求命供養恭敬故¹¹⁴。三者過上下界、已
 76 過學地¹¹⁵。如經、離諸重擔、逮得已利、盡諸有結
 77 故。八者攝取上下功德、如經、善得正智心得解
 78 脫故。九者攝取應作利益衆生功德、如經、一切
 79 心得自在故。十者攝取上首功德、如經、到第一
 80 彼垢故。彼諸并功德成就者、有十三句功德、二
 81 門¹²⁴巧示現應知。何等二門故¹²⁵。一者上支下支門。
 82 二者攝取事門。上支下支門者、所謂捨相・別相¹²⁶、
 83 應知。皆得阿耨多羅三藐三菩提不退轉者¹²⁷
 84 是捨相、餘者是別相。彼不退轉有十種示現¹²⁸。
 85 一者住聞法不退轉、如經、皆得隨羅尼故。二者
 86 樂說不退轉、如經、大弁才樂說故¹³¹。三者說不退
 87 法輪故。四者依止善知識不退轉、以身心業依
 88 色身攝取故、如經、供養无量百千諸佛故、於諸
 89 佛所種諸善根故¹³³。五者斷一切疑不退轉、如經、常
 90 為諸佛之所稱嘆故¹³⁴。六者為何等何等事說法、
 91 入彼彼法不退轉、如經、以大慈悲而脩身心故。七
 92 者入一切智如實境界不退轉、如經、善入佛惠故¹³⁶。
- (第四紙)

112 弁 || 辨【鎌】大 113 (故) 一【大】 114 (故)
 一【大】 115 (故+鎌)【大】 116 (故+大) 117 (故)
 +【大】 118 下 || 上【鎌】【大】「下」の右に「上イ」と異本
 注記あり。119 (得) 一【鎌】【大】 120 (彼諸) 一【鎌】
 【大】 121 并 || 菩薩【鎌】【大】 122 有 || 彼【鎌】【大】 123
 (功德) 一【鎌】【大】 124 巧 || 攝義【鎌】【大】 125 (故)
 一【鎌】【大】 126 (此義+大) 127 得 || 於【鎌】【大】
 128 (有) 一【鎌】【大】 129 (何等為十)+鎌、(此義應知
 何等為十)+【大】 130 隨 || 隨【鎌】【大】該當箇所は、意味
 上「隨」とすべきであるが、底本では確かに「隨」を少し崩
 したような字で書かれている。131 弁 || 辨【鎌】、辨【大】、
 辨【三】 132 (轉如經轉不退轉)+【鎌】【大】 133 (語) 一
 【鎌】 134 嘆 || 歎【大】 135 (何等) 一【鎌】 136 惠 || 慧
 【鎌】【大】

- 94 八者依我空法空不退轉、如經、通達大智故。九
 95 者入如實境界、不退轉如轉、如經、到於彼垢故。
 96 十者作應所作住持不退轉、如○、能度无量百千
 97 衆生故。攝取專門者、示現諸菩薩住何等清淨
 98 地中・因何等方便・何等境界中、應作所作故。地
 99 清淨者、八地已上三地无相行寂靜清淨故。方
 100 便者有四種。一者攝取妙法方便、住持妙法以衆
 101 説力為人説故。二者攝取善知識方便、以依善知
 102 識所依作應作故。三者攝取衆生方便、以不捨
 103 衆生故。四者攝取智方便、以教化衆生（令¹⁴⁵*¹⁴⁶入
 104 彼智故。境界者易解¹⁴⁷復有攝取專門、示現¹⁴⁸¹⁴⁹
 105 諸地攝取勝功德不同二乘功德故。第八地中无
 106 功用智不同不上故。不同下者、下功用行不能
 107 動故。不同上者、上无相行不能動故自然而
 108 行故。於第九地中得勝進陀羅尼門、具足四
 109 无導自在故。於第十地中不退轉法輪得受佛¹⁵⁵
 110 位、如轉輪王子故、以得同攝功德故。三攝功德¹⁵⁶
 111 成就者、示現依何處・依何心・依何智・依何尋境
 112 界行・依何等能弁故¹⁶¹。依何處者、依善知識故。

137 (如轉) 一【鎌】一【大】 138 應所作住持 〓 所應作住持
 【鎌】、所應作【大】 139 (經名稱普聞无量世界) + 【鎌】三三、
 (經) + 【大】 補入記号の右に「經」とあり。 140 量 〓 數
 【鎌】一【大】 141 因 〓 以【大】 142 (於) + 【鎌】一【大】 143
 應作所 〓 作所應【鎌】一【大】 144 所依作 〓 作所【鎌】一【大】
 「依」の左に見せ消ち記号あり。 145 (生) 一【鎌】一【大】
 146 (令*) の右に見せ消ち記号、下方欄外に「令」とあり。
 147 (境界者易解) 一【鎌】一【大】 148 (又) + 【大】 149
 (更) + 【大】 150 (諸) + 【鎌】一【大】 151 (謂) + 【鎌】一【大】
 152 不 〓 下【鎌】一【大】 「不」の左に見せ消ち記号、右に
 「下」とあり。 153 (故) 一【大】 154 (於) 一【大】 155
 (智) + 【鎌】一【大】 156 (於) 一【大】 157 (轉) + 【鎌】一【大】
 158 (大) + 【鎌】、(之) + 忒 + 【大】 159 (義) + 【鎌】一【大】 160
 (三) 一【鎌】一【大】 「三」の右に「四イ」と異本注記あり。
 161 弁 〓 辨【鎌】、辦【大】、辯【三】【宮】

- 113 依何心者、我依衆生心教他畢竟利益一切衆162
- 114 生故。依何智者、依三種智。一者授記蜜智。164二者
- 115 諸通智。三者真實智。依何尋境界行・依何尋
- 116 能弁者、即三種智所攝應知。165四威儀如法住166
- 117 成就者、有四種示現。何尋為四。一者衆圍遶。167二者
- 118 前後。三者供養恭敬。四者尊重讚嘆。168如經、尔
- 119 時世尊四衆圍遶、供養・恭敬・尊重讚嘆故。如来169
- 120 説170欲時至成就者、為諸菩薩説大乘經故。此大乘
- 121 脩171多羅有十七種名、顯示甚深功德應知。何
- 122 等172〇七十。173云何顯示。一名无量義經者、成就字義
- 123 故、以此法門説方便説174彼甚深法175少境界法176。
- 124 彼甚深法少境界者、諸佛如来最勝境界法。二
- 125 名最勝修多羅177一者、於三藏中最少勝藏178、善成
- 126 就故。三名大方廣者、无量大乘門、隨順衆生
- 127 根住持成就故。四名教菩薩法者、為教記根焚善
- 128 薩隨順器法成就故179。五者名佛所護念者、依佛如
- 129 来有此法故。六者名一切諸佛秘密法者、此法甚
- 130 深如来知故180。七名一切佛藏者、如来功德三昧之
- 131 藏在此經故。八名一切諸佛秘密處者、根未181

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（淺野）

162 我依||我依度【鎌】、依【大】 163 衆生心教他||衆生心
教化【鎌】、教化衆生心【大】 164 蜜||密【鎌】 【大】 【三】
165 弁||辨【鎌】、辨【大】、辯【三】 【宮】 166 【四】 一
167 【大】 167 【有】 一 【大】 168 遶||繞【大】 169 嘆||
歎【鎌】 【大】 170 遶||繞【大】 171 嘆||歎【鎌】 【大】
172 説欲||欲説法【鎌】 【大】 173 脩||修【鎌】 【大】 174
七十七||十七【鎌】 【大】 【下】の右下に倒置符あり。175 【方】
便説一 【鎌】 【大】 176 少||妙【鎌】 【大】 【少】の右に
「妙欸」とあり。177 【法】 一 【鎌】 【大】 178 少||妙【鎌】
179 法||故【鎌】 【大】 【少】の右に「妙欸」とあり。179 法||故【鎌】
180 【二】 一 【鎌】 【大】 181 少勝||勝妙【鎌】 【大】 【少】
の右に「妙欸」とあり。「勝」の右の墨付は倒置符か。182
〔此法門中〕+ 【大】 183 【經】 + 【大】 184 【中善成就故】 +
〔大〕 185 【以】 + 【大】 186 【記】 ||化【鎌】 【大】 187 器法||
法器善【鎌】 【大】 188 【者】 一 【鎌】 【大】 189 依佛||以
依【鎌】 【大】 190 【者】 一 【鎌】 【大】 【者】の右に見せ消
ち記号あり。191 密||蜜【宮】 192 如来||唯佛【鎌】 【大】
193 佛||諸佛【鎌】、諸佛之【大】 194 【法】 一 【鎌】 【大】
底本の字は、或いは「法」のくずし字か。偏は「イ（入偏）」
のように見え、該当箇所前後に見られる「法」の字とは形
が異なっている。195 密||蜜【宮】 196 【以】 + 【大】

- 132 麁衆生非法器不授与故。九名能生一切諸佛經¹⁹⁷
- 133 者、聞此法門能成諸佛大菩提故。十名一切諸佛道¹⁹⁸
- 134 場者、聞此法門能成阿耨多羅三藐三菩提、非餘¹⁹⁹
- 135 修多羅故。十一名一切諸佛所轉法輪者、以此法門²⁰⁰
- 136 能破一切諸部導故。十二名一切諸佛堅固舍利²⁰¹
- 137 者、謂如來真如來法身於此修多羅不壞故。十²⁰²
- 138 三名一切諸佛大巧方便經者、依此法門成大菩²⁰³
- 139 提已、為衆生說天・人・耳耳・辟支佛等諸善根法²⁰⁴
- 140 故。十四名說一乘經者、以此法門顯示如來阿耨多²⁰⁵
- 141 羅三藐三菩提究竟之躰、彼二乘非究竟故。十²⁰⁶
- 142 五名第一義住者。此法門即是如來法身究竟²⁰⁷
- 143 住處故。十六名妙法蓮花經者、有二種義。何²⁰⁸
- 144 等二種。一者出水義、以不可盡出離小乘泥濁²⁰⁹
- 145 水故。復有義、如蓮花出泥水喻、諸耳耳得入²¹⁰
- 146 如來大衆中坐、如諸菩薩坐蓮花上、聞說如來²¹¹
- 147 无上智惠清淨境界、得證如來密藏故。二〇花²¹²
- 148 開者、衆生於大乘中心怯弱不能生信、故開示²¹³
- 149 如來淨妙法身令生信心故。十七名法門者、攝成²¹⁴
- 150 就故。攝成就者、攝取无量名〇(句字)²¹⁵身、頻婆羅阿²¹⁶
- (第六紙)

197 非非受【鎌】、菩提受【大】 198 (之) + 大 199 開
 〇以【大】 200 (能) - 鎌 201 (諸佛) + 大 202 如
 來〇實【鎌】【大】 203 (敗) + 鎌 204 耳耳〇聲聞
 【鎌】【大】 205 (根) - 鎌 206 (道) + 大 207
 【以】 + 大 208 (諸佛) + 大 209 花經〇華【鎌】、華經
 【大】 210 (又) + 鎌 211 蓮花出〇彼蓮華出於【鎌】
 【大】 212 耳耳〇聲聞【鎌】【大】 213 花〇華【鎌】【大】
 214 惠〇慧【鎌】【大】 215 (深) + 鎌【大】 216 密〇蜜
 【宋】【元】【宮】 217 花開者〇名華開義【鎌】、華開義【大】
 補入記号の右に「者」とあり。 218 (以諸) + 鎌【大】 219
 (其) + 鎌【大】 220 (是) + 鎌【大】 221 (諸佛) + 大
 222 (最上) + 鎌【大】 223 (句字)の右に「句字」とあ
 り。 224 (有) + 大

- 151 閑婆等偈故。此十七句法門者是捨、餘句是別
 故。○經、為諸菩薩說大乘經、名无量義如是等。○所依²³⁰
 152 說法隨順威儀住成就者、示現依何等法說
 153 法。依三種法故。一者依三昧成就。故以三昧成就、
 154 二種法示現。何等為二。一者成就自在力、身心不
 155 動故。二者離一切諸障、隨自在力故。此自在力復
 156 有二種。一者為隨順衆生不見對治攝取寬普
 157 提分法故。二者為對治无量世取來堅執煩惱故。
 158 如經、佛說此經名无已、結跏趺坐、入於无量義
 159 處三昧等故。二者依器世間、三者依衆生世間、擣²⁴⁴
 160 動世界及知過去无量劫事小故。如經、是時天
 161 雨曼陀一華、乃至歡喜合掌一心覲佛故。○依止
 162 說曰成就者、彼諸大衆現見異相不可思議事。如
 163 來今者應為我諸說。渴仰欲聞生希有心名
 164 依止說曰成就。是故如來放大光明、示現諸世界中種²⁵⁷
 165 事故、先示現外事六種振動等、次示現此法門中
 166 內證甚深微密法故、又依器世間・衆生世間・衆
 167 生世間、數種種・量種種、具足煩惱差別・具足清
 168 淨差別・佛法弟子差別示現三種寶故。復乘
 169 興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（淺野）

225 偈 || 舒盧迦偈 [鎌] [三] [宮]、舒盧迦 [大] 226 (者)
 + [鎌] [大] 227 (故) - [鎌] [大] 228 (如) + [鎌]
 [大] 補入記号の右に「如」とあり。229 (故) + [鎌] [大] 230
 所依 || 依所 [大] 231 隨順威儀 || 威儀隨順 [大] 232
 (何等) + [大] 233 故以 || 以 [鎌] [三] [宮]、故以 -
 [大] 234 (法) - [鎌] [大] 235 (現) - [鎌] 236 (何
 等為二) - [大] 237 (諸) - [鎌] [大] 238 (者) -
 [鎌] [大] 239 (者) - [鎌] [大] 240 (取) - [鎌]
 [大] 241 (名无) - [鎌] [大] 242 跏 || 加 [大] 243
 (身心不動如是) + [大] 244 擣 || 振 [鎌]、震 [大] 「擣」の
 左に見せ消し記号あり。下方欄外に「振」とあり。245 小
 || 寺 [鎌]、如是等 [大] 底本の「小」に似た字は、「亦」に
 似た略字(「等」の略字)のように、「等」の略字か。246
 一華 || 羅華 [鎌]、羅花 [大] 247 (次第) + [大] 248 歡 ||
 勸 [鎌] 249 覲 || 觀 [大] 250 彼 || 為 [大] 251 現見 ||
 示現 [大] 252 (可) - [大] 253 (大衆見已生希有心渴仰
 欲聞生如是念) + [大] 254 (諸) - [鎌] [大] 255 渴仰欲
 聞生希有心 || 故 [大] 256 (他方) + [鎌] [大] 257 (種) +
 [鎌]、(種諸) + [大] 258 (為大衆) + [大] 259 振 || 震
 [大] 260 (為) + [大] 261 法故 || 之法 [大] 262 (衆生世
 間) - [鎌] [大] 263 弟 || 弟 [鎌] [大] 264 (種) -
 [鎌] [大]

- 170 差別、有世界有佛・有世界无佛、令衆生見修行者未得果・得道者已得果。如經、修行得道者故。へ數種種者、示現種種觀。略說四種觀。一者食。二者聞法。三者修行。四者樂。如經、余時佛放眉間白毫相光、乃至以佛舍利起七寶塔故。²⁶⁹ 行菩薩道者、教化衆生依四攝法方便攝取、應知。如經中、所說當自推取。自此以下、示現大衆現前欲聞法成就。問一人者、多人欲聞生希有心、是故唯問文殊師利、如是示現世尊弟子隨順於法不相違故。今佛世尊現神變相者（第七紙）為何等義。為現大相因故為故。大相者、為說妙法蓮花經故現大瑞相、為說如來所得少法不可思議等文句故。有二種義、是故仰推文殊師利。²⁸¹ 一者現見諸法。二者離諸因緣、唯自成就彼法故。示現種種瑞相者、示現彼彼事故。如彼事相現沒住滅應知。以文殊師利能記彼事故、以文殊師利所作成就・曰果成就現見彼法故。へ所作成就者、有二種。一者功德成就。二者智慧成就。²⁸⁸ 曰成就者、一切智成就。²⁸⁹ 又○縁²⁹⁰

265 (諸) + 鎌 [大] 266 観 || 鎌 [大] 267 観 || 鎌 [大] 268 (次第) + 大 269 (故) - 鎌 [大] 270 (此義) + 大 271 (中) - 鎌 [大] 272 推 || 攝 [宮] 273 現前欲聞法 || 欲聞現前 [大] 欲聞現前法 [三] [宮] 274 第 || 弟 [鎌] [大] 275 (說大法故) + 大 276 因故為故 || 因故為 [鎌]、以為說因 [大] 277 (現) + 鎌 [大] 278 花 || 華 [鎌] [大] 279 少 || 妙 [鎌] [大] 右に「妙款」とあり。 280 (「字章」+ 鎌) [大] 281 (何等為二) + 鎌 [大] 282 (故) + 鎌 [大] 283 (内) + 鎌 [大] 284 (諸) + [大] 285 (以為) + 鎌 [大] 286 (當善) + 鎌 [大] 287 (此) + 大 288 患 || 慧 [鎌] [大] 289 (故) + [大] 290 (復有因謂縁因故) + 鎌 [大] 補入記号の右に「復有曰謂縁曰故」とあり。

- 189 曰成就者、衆生相也。²⁹¹ 果成就者、說大法也。²⁹² 種種²⁹³
- 190 佛國土者、²⁹⁴ 示現彼國土中種種²⁹⁵ 差別應知。淨
- 191 妙國土者、謂无煩惱衆生住處故。如經、照於
- 192 東方万八千世界、乃至悉見彼立佛國界嚴
- 193 故。如來為上首者、諸菩薩等依如來住故、以彼
- 194 如來於彼國土一切大衆中得自在故。如經、又
- 195 見彼土現在諸佛、如是等故。自此已下明^{300 301}
- 196 聖者。文殊師利菩薩³⁰² 以宿命智現見過去因
- 197 相果相成就十種事如現在前、是故能答
- 198 旃勒。^{304 305} 現見過去曰相者。文殊師利自見己身、
- 199 曾於彼諸佛國土中修^{307 308} 種種³⁰⁹ 行事故。現見過
- 200 去果相者。文殊師利自見己身、是過去妙光菩
- 201 薩、於彼仏所聞此法門、為衆生³¹² 故。³¹³ 成就十種
- 202 事者、何等為十。³¹⁴ 一者現見大義曰成就。二者現
- 203 見世間文字章句甚深意曰成就。三者現見
- 204 希有曰成就。四者現見勝妙因成就。五者現
- 205 見受用大曰成就。六者現見攝取一切諸佛轉
- 206 法輪曰成就。七³¹⁶。八者現見能進入因成就。九者
- 207 現見憶念因成就。十者現見自身所逐事³¹⁷ 曰

291 生相也。相具足故【鎌】〔大〕²⁹² 也。故〔大〕²⁹³
 【異】+【鎌】、【異異】+〔大〕²⁹⁴（為此）+〔大〕²⁹⁵（異異）
 +〔大〕²⁹⁶（故）+〔大〕²⁹⁷（次第）+〔大〕²⁹⁸（立）
 一【鎌】〔大〕²⁹⁹一切諸【鎌】〔大〕³⁰⁰已以〔大〕³⁰¹
 一【次】+〔大〕³⁰²（菩薩）一〔大〕³⁰³（種）一〔大〕
 304（菩薩）+【鎌】〔大〕³⁰⁵（云何）+〔大〕³⁰⁶者。謂
 〔大〕³⁰⁷（佛）一〔大〕³⁰⁸修處處修行〔大〕³⁰⁹（云
 何）+〔大〕³¹⁰者。謂〔大〕³¹¹（世）+〔大〕³¹²（説）+
 【鎌】〔大〕³¹⁴上方欄外に「説」とあり。
 〔大〕³¹⁶種事者何等為十事〔大〕³¹⁵甚深意。意甚深
 記号の右に「者現見善堅實如來法輪因成就」とあり。³¹⁷
 逐。逐【鎌】、經〔大〕

- 208 成就。大義曰成就者、八句示現應知。³¹⁸一者欲論
 209 大法鼓。³²⁰二者欲雨大法雨。三者欲擊大法鼓。四者（第八紙）
 210 欲運大法幢。五者欲燃大法燃。³²¹六者欲吹大法蠶。³²²
 211 七者欲不斷大法鼓。八者欲說大法義。³²⁴此八句示
 212 現見如來欲論大法等故。何等名為八種大義。³²⁶
 213 謂有疑者為疑故。以斷疑者增長淳熒彼智。³²⁷
 214 身故。根淳熒者為說二種微蜜境界。○謂耳耳。³²⁸
 215 蜜境界。二謂菩薩蜜境界。大法鼓者二句、示現以
 216 遠聞故。入蜜境界者、令進取上上清淨義故。取上上清
 217 淨義者、令進取一切種智得現見故。³³⁰取一切智現
 218 ○者見、為一切法建立名字章句義故。建立名字章句
 219 義者、令人不可說證智轉法輪故。現見世間名字
 220 章句意甚深因成就者、如經、我於過去諸佛、³⁴³
 221 曾見此瑞、乃至故現斯瑞故。現見希有因成
 222 就者、无量者示現過彼阿僧祇劫不可時不可
 223 得故。不可思議不可量者、示現過彼阿僧祇劫
 224 不可得故。復示現五種劫、一者夜・二者晝・三者
 225 月・四者時・五者年、示現彼无量无边劫故。如經、如過
 226 去无量无边不可思議阿僧祇劫、尔時有佛号

318 [此義] + [大] 319 [何等爲八] + [大] 320 [鼓] -
 [鎌] [大] 321 然 || 然 [大] 322 然 || 炬 [鎌]、燈 [大]
 323 蠶 || 蝶 [鎌] [三] [宮] 324 [義] - [鎌] [大] 325
 [欲] + [大] 326 [見] - [鎌] [大] 327 [斷] + [鎌] [大]
 328 以 || 已 [鎌] [大] 329 蜜 || 密 [鎌] [大] [明] 330
 謂 || 一謂 [鎌]、一者 [大] 補入記号の右に「二」とあり。
 331 耳耳 || 聲聞 [鎌] [大] 332 蜜 || 密 [鎌]、微密 [大]、
 歡喜 [三] [宮] 333 謂 || 者 [大] 334 蜜 || 密 [鎌]、微密
 [大]、微蜜 [宋] [元] [宮] 335 蜜 || 密 [鎌] [大] [明]
 336 [彼] + [大] 337 [進] + [大] 338 上 || 名 [宮] 339
 [彼] + [大] 340 [令彼進] + [大] 341 智 || 種智得 [大]
 342 者見 || 見者 [鎌] [大] 「見」の右の墨付は倒置符か。
 343 意 || 義 [明] 344 [說大教故] + [鎌] 345 [所] + [鎌]
 346 [次第] + [大] 347 端 || 瑞 [鎌] [大] 348 [以] + [鎌]
 [大] 349 [者示現過彼阿僧祇劫不可] - [鎌] [大] 350
 [不可稱] + [鎌] [大] 351 僧 || 羅 [宮] 352 [又] + [大]
 353 [故] + [大] 354 一者 || 所謂 [大] 355 [者] -
 [大] 356 書 || 畫 [鎌] [大] 357 [者] - [大] 358 [者]
 - [大] 359 [者] - [大] 360 [彼] - [大] 361 劫 ||
 諸法 [大]、諸劫 [三] [宮]

- 227 日月燈明、乃至得阿耨多羅三藐三菩提、成就一
 228 切種故。現見勝妙曰成就者、以諸佛并自受用示現
 229 故。如經、次復有佛之名日月燈明、乃至所可說
 230 法初中後善故。現見受用大曰成就者、是時王
 231 子受勝妙樂各捨出家、復彼大眾於余許時
 232 不生疲倦心故。如經、其最後佛、未出家時、乃佛
 233 至授記已、便於中夜入無餘顯涅槃故。現見攝取
 234 一切諸佛轉法輪曰成就者、法輪不斷故。如經、佛
 235 滅度後、妙光菩薩持妙法蓮華經、滿八十小劫
 236 為人演說故。現見善堅實如來法輪曰成就者、佛
 237 滅度後無量時說故。如經、日月燈明佛八字
 238 皆師妙光、乃至皆得令其堅固阿耨多羅
 239 三藐三菩提故。現見進入因成就者、彼諸王子得
 240 大菩提故。如經、是諸王子、乃至皆成佛道故。現見
 241 憶念曰成就者、為他說法利益他故。如經、其最後
 242 成佛者名曰燃燈、乃至尊重讚歎故。現見自身
 243 所逢事因成就者、以自身受勝妙樂故。如經、佛
 244 勒當知、乃至佛所護念故。汝等求名者示現知過
 245 去事故、復示現得彼法具足故。○、方便品。余時世

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（淺野）

362 (次第) + [大] 363 (令) + [鎌] [大] 364 (就) -
 [鎌] [大] 365 (智) + [鎌] [大] 366 以 || 示現 [大] 367
 (及語) + [大] 368 并 || 菩薩 [鎌] [大] 369 受用示現 || 示
 現受用 [鎌]、受用 [大] 370 之 || 亦 [鎌] [大] 371 (次
 第) + [大] 372 不生疲倦心 || 心不疲倦 [大] 373 (次第) +
 [大] 374 佛至 || 至佛 [鎌] [大] 375 (顯) - [鎌] [大]
 376 (故) - [鎌] [大] 377 (字) - [鎌] [大] 378 (次
 第) + [大] 379 得令其 || 令其 [鎌]、令 [大] 380 (心) +
 [大] 381 (能) + [鎌] [大] 382 (次第) + [大] 383 燃燈
 || 然燈次第 [大] 384 歎 || 嘆 [鎌] 385 迺 || 遂 [鎌]、經
 [大] 386 (文殊) + [鎌] 387 (次第) + [大] 388 (彼) +
 [鎌] [大] 389 (又) + [鎌] [大] 390 (今) + [鎌] [大]
 391 (皆) + [鎌] [大]、底本と [三] [宮] は一致。392 (又
 依義攝三故) - 與說故。如經今佛世尊欲說大法等故。二成如實
 說故。如經我於過去曾見等故。三令得說故。如經諸人今當知
 等故 + [大] 393 (自此已下示現所說法因果相應知) + [鎌]
 [大] 394 (第二) + [鎌] [大] 395 (經曰) + [鎌] [大]
 [余] の右に「經曰」と異本注記あり。

- 246 尊入甚深三昧正念不動、以來實智396、從三
 247 昧安詳而起。起已告舍利弗、諸佛智慧甚深无
 248 量、其智慧門難見難覺難知難解難入、如來
 249 成所證一切耳耳403·辟支佛等所不能知。何以故。舍利
 250 弗、如來·應·正遍知已曾親近供養无量百千
 251 万億那由他佛、於諸佛所盡行諸佛所修阿耨
 252 多羅三藐三菩提法。舍利弗、如來已於无量百千
 253 万億那由他劫勇猛精進、所作成就·名稱普
 254 那407。舍利弗、如來畢竟成就希有之法。舍利弗、難
 255 解之法如來能知。舍利弗、難解法者、諸佛如來
 256 隨宜所說意趣難解、一切聲聞辟支佛所不能
 257 知。何以故。舍利弗、諸佛如來自在說因成就故。舍利
 258 弗、如來成就種種方便·種種知見·種種念409·種種
 259 言辭。舍利弗、吾從成佛已來、於彼彼處廣演言教、
 260 無數方便引道410衆生於諸著處令得解脫。舍
 261 利弗、如來知見方便到於彼坊。舍利弗、如來知見
 262 廣大深遠·无鄣无碍、力·无畏411·不共法·根·力·菩提分·禪
 263 定·解脫三昧3·摩跋提皆已具足。舍利弗、諸佛
 264 如來深入无際、成就一切未曾有法。舍利弗、如來

396 來||如【鑑】大】 397 視||觀【鑑】大】 398 告||即
 告尊者【大】 399 【言舍利弗+【大】 400 惠||慧【鑑】
 大】 401 惠||慧【鑑】大】 402 【成】一【鑑】大】 403
 耳耳||聲聞【鑑】大】 404 那由他||無數諸【大】 405 諸
||百十億那由他【大】 406 【万】一【大】 407 那||聞【鑑】
 大】 408 【等+【鑑】大】 409 視||觀【鑑】大】 410
 道||導【鑑】大】 411 【所+【鑑】大】

- 265 能種種分別巧說諸法、言辭柔潤⁴¹²悅可衆心。⁴¹³舍
 266 利弗、不須復說。舍利弗、佛所成就第一希有難
 267 解之法。舍利弗、唯佛與佛說法、諸佛如來能
 268 知彼法究竟實相。舍利弗、唯佛如來知一切
 269 法。舍利弗、唯佛如來能說一切法。何等法。云何法。
 270 何似法。何相法。何躰法。何等・云何・何似・何相・何躰、
 271 如是等一切法、如來現見非不現見。論曰、自此已
 272 下示現所說法因果相應知。⁴¹⁵余時世尊入甚深
 273 三昧正念不動、以如實智現從三昧安祥而起、
 274 起已告舍利弗者、示現如來得自在力故・如來入定
 275 无能驚寤故。何故唯告舍利弗・不告餘聲聞
 276 等者。隨深智惠與如來相應故。⁴²²不告諸菩薩者。
 277 へ有五種義。一者為諸聲聞所應作事故。⁴²³二者為
 278 諸聲聞迴心取大菩提故。⁴²⁴三者護聲聞恐怯弱故。四者
 279 為令餘人善思念故。⁴²⁵五者為讚聲聞不起所作已
 280 弁心故。⁴²⁷諸佛智惠甚深无量者、為諸大衆生
 281 尊重心、畢竟欲聞如來故。⁴²⁸言甚深者、顯示二種甚
 282 深者顯示二種甚深義應知。⁴³¹何寺為○。一者證
 283 甚深、謂為諸佛智惠甚深无量故。二者阿含

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（淺野）

412 潤〓軟【鎌】大 413 〔止〕+【鎌】大 414 論〓釋
 〔大〕 415 〔自此已下示現所說法因果相應知〕一【鎌】大
 416 現〓觀【鎌】大 417 祥〓詳【鎌】大 418 〔即〕+
 〔大〕 419 〔尊者〕+〔大〕 420 〔其〕+〔大〕 421 惠〓慧
 〔鎌〕大 422 〔何故〕+【鎌】大 423 〔作〕一〔大〕 424
 取〓趣向【鎌】大 425 〔語〕+【鎌】大 426 讚〓諸
 〔鎌〕大 427 弁〓辨【鎌】、辦〔大〕、辯〔宮〕 428 惠〓
 慧【鎌】大 429 〔說〕+【鎌】大 430 者顯示二種甚深
 〓之【鎌】大 431 〔如是〕+〔大〕 432 〔二〕+【鎌】大
 補入記号の右に「二」とあり。 433 〔為〕一【鎌】大 434
 惠〓慧【鎌】大

- 284 甚深、謂智惠門甚深无量故。甚深者是捨相、
 285 餘者是別。⁴³⁸證甚深者有五種示現。一者義甚深、
 286 謂依何等義甚深故。二者實躰甚深。三者內證
 287 甚深。四者依止甚深。五者无上甚深。何故五甚深
 288 者。謂大菩提故。⁴⁴¹大菩提者、如來所證阿耨多羅三菴
 289 三菩提故。又甚深者。一切聲聞辟支佛等所不能知
 290 故名甚深。言智惠者、謂一切種・一切智二義故。如
 291 經、諸智惠甚深无量、甚智惠門難見難覺難知
 292 難解難入、一切聲聞辟支佛等所不能知故。說阿含
 293 甚深者、示現有八種。⁴⁵¹一者受持讀誦甚深、如經、佛
 294 已曾親近供養无量百千萬億無數諸佛故。二
 295 者修行甚深、如經、百千萬億那由他於諸佛所、盡⁴⁵⁷
 296 諸佛所修阿耨多羅三菴三菩提法故。○三者果行
 297 甚深、如經、舍利弗、如來已於无量劫勇猛精進
 298 所作成就故。四者增長功德心甚深、如經、名稱普
 299 聞故。五者快妙事心甚深、如經、成就希有法故。⁴⁶⁰六者（第十一紙）
 300 无上甚深、如經、舍利弗、難解之法如來能知故。七
 301 者入甚深、入甚深諸者、名字章句意難得故、自在⁴⁶²
 302 住持不同舍利外道說回緣法、名為甚深。如經、舍

435 惠 || 慧【鎌】大 436 【言】+【鎌】大 437 【此】+
 【大】 438 者是別 || 者是別相【鎌】、別相【大】 439 【有】
 一【鎌】大 440 故五 || 故无上【鎌】、者【大】 441 【者】
 一【大】 442 【故】一【大】 443 又 || 云何【大】 444 【者】
 一【大】 445 惠 || 慧【鎌】大 446 二 || 智【鎌】、(二)
 一【大】 447 智惠 || 佛智慧【鎌】大 448 甚智惠 || 其智
 慧【鎌】大 449 【說】一【鎌】大 450 含 || 舍【明】
 451 示現有八種 || 八種示現【鎌】大 452 【佛】一【大】 453
 ち記号および擦り消し跡あり。 454 【於】+【大】 455 【百千萬億那由他】一
 【鎌】大 456 【於諸】一【大】 457 【行】+【鎌】大 458 【百
 千萬億那由他】+【鎌】大 459 【舍利弗
 如來畢竟】+【鎌】大 460 【之】+【鎌】大 461 【諸】一
 【鎌】大 462 在 || 以【大】 463 【舍利】一【鎌】大

- 303 利弗、難解法者、諸佛如來隨宜所說法意趣⁴⁶⁴
- 304 難解故。八者不共耳耳⁴⁶⁵。辟支佛所作住持甚深、如○經、一⁴⁶⁷
- 305 切聲聞辟支佛所不能知故⁴⁶⁸。如意是說妙法功德足、次⁴⁶⁹
- 306 說如來法師功德成就應知。如經、何以故。諸佛如來⁴⁷⁰
- 307 自在說曰成就故。如來成就四種功德、故能度衆⁴⁷¹
- 308 生。何等為四。一者往成就、如經、如來成就種種方便⁴⁷²
- 309 故。種種方便者、從兜率天退乃至示現入炎故⁴⁷³。二
- 310 者教化成就、如經、種種知見故。種種知見者、示現⁴⁷⁴
- 311 染淨諸曰故。三者功德畢竟成就、如經、種種念現故。種⁴⁷⁵
- 312 種念現者、以說彼法成就曰緣、如法相應故。四者說成⁴⁷⁶
- 313 (就、如經、種種言辭各故。種種言辭者、以四无導智依⁴⁷⁷
- 314 何等何等名字章句・隨何等何等衆生能受而為⁴⁷⁸
- 315 說故。復有義、種種方便者、示現外道邪法如是種⁴⁷⁹
- 316 種過失故、復示現諸佛正法如是如是種種功德⁴⁸⁰
- 317 故。如經、舍利弗、吾從成佛已來、廣演言教、无數方⁴⁸¹
- 318 便、引導衆生於諸著、處令得解脫故。復无數方便⁴⁸²
- 319 者、方便令人諸善法故。復方便者、斷諸疑故。復方⁴⁸³
- 320 便者、令人增上勝智故。復方便者、依四攝法攝取衆⁴⁸⁴
- 321 生令得解脫故。諸著處者、彼處處著、或著諸⁴⁸⁵

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻(淺野)

464 〔所〕一〔大〕 465 〔法〕一〔鎌〕 466 耳耳 〓 聲聞
 〔鎌〕一〔大〕 467 下方欄外に「如」とあり。 468 〔等〕+〔鎌〕
 〔大〕

469 〔妙法蓮華經憂波提舍卷上〕+〔大〕
 校注 1 憂 〓 優 〔鎌〕 〔三〕〔宮〕 2 波 〓 婆 〔明〕

470 〔妙法蓮華經憂波提舍卷下〕/大乘論師婆藪槃豆釋³ 後魏
 北天竺三藏菩提留支/共沙門曇林等 譯+〔大〕
 校注 1 憂 〓 優 〔鎌〕 〔三〕〔宮〕 2 〔大乘論師〕一
 〔鎌〕 3 尺 〓 菩薩道 〔鎌〕 4 〔後魏北天竺〕一 〔鎌〕、
 後魏北天竺 〓 元魏北天竺 〔三〕〔宮〕 5 三藏 〓 三藏法
 師 〔鎌〕 〔三〕〔宮〕 6 〔共沙門曇林寺〕一 〔鎌〕

471 〔方便品之餘〕+〔鎌〕 〔大〕 472 意是 〓 是 已 〔鎌〕 〔大〕
 473 〔具〕+〔鎌〕 〔大〕 474 〔舍利弗〕+〔鎌〕 〔大〕 475 上方
 欄外に「四成就」とあり。 476 往 〓 住 〔大〕 477 〔舍利弗〕
 +〔鎌〕 〔大〕 478 〔謂〕+〔大〕 479 退 〓 中退没 〔大〕 480
 炎 〓 涅槃 〔鎌〕 〔大〕 481 〔知〕一 〔鎌〕 〔大〕 482 現 〓 觀
 〔鎌〕 〔大〕 483 現 〓 觀 〔鎌〕 〔大〕 484 〔就〕 〓 就 〔鎌〕
 〔大〕 上方欄外に「國」とあり。 485 〔等〕一 〔鎌〕 〔大〕

486 〔又〕+〔大〕 487 〔種種方便〕+〔大〕 488 〔所有〕+〔大〕
 489 〔如是〕+〔鎌〕 〔大〕 490 〔復〕一 〔鎌〕、復 〓 種種方便
 〔大〕 491 〔所有〕+〔大〕 492 導 〓 道 〔鎌〕 493 復 〓 又
 〔大〕 494 復 〓 又 〔大〕 495 復 〓 又 〔大〕 496 〔中〕+〔大〕
 497 復 〓 又 〔大〕

- 322 界・或著諸地・或著諸分・或著諸乘故。⁴⁹⁸ 著界者、⁴⁹⁹
- 323 著欲・色・无色故。⁵⁰⁰ 著地者、著戒、三昧、初禪定地乃至非
 324 非相、及滅盡定地故。⁵⁰⁸ 著分者、著在家・出家分故。著
 325 在家分者、著已同類作種種業邪見等故。⁵¹³ 著出家
 326 分者、著名聞利養種種諸覺煩惱等故。⁵¹⁴ 著乘者、⁵¹⁵
- 327 聲聞乘・菩薩乘故。著聲聞乘者、樂持小乘戒、求須陀
 328 恒・斯陀含・阿那含・阿羅漢等故。著大乘者、著利養
 329 恭敬等、著分別現種種法相乃至佛地故。⁵²¹ 復種種（第十二紙）
 330 知見者、自身成就不可思議境界、與聲聞菩薩⁵²⁴
- 331 等故。如經、舍利弗、如來知見方便到於彼垢故。到彼
 332 垢者、勝餘一切諸菩薩故。⁵²⁶ 復種種念現者、如經、舍
 333 利弗、如來知見廣大深遠无鄣无導、力・无畏・不共⁵²⁸
- 334 法・根・力・菩提分・禪定・解脫三昧三摩跋提皆已具
 335 足故。⁵²⁹ 又第一・成就可化○生衆、依止善知識而成就故。⁵³⁰
- 336 第二・成就根斃衆生、令得解脫故。⁵³² 第三・成就○家力⁵³¹
- 337 自在、淨降伏故。⁵³³ 第四・說成就者有七種。⁵³³ 一者種種
 338 成就、如經、舍利弗、諸佛如來深入無際、成就一切未曾
 339 有法故。⁵³⁴ 二者言語成就、得五種義妙音聲說故、⁵³⁵
 340 如經、如來能種種分別巧說諸法、言辭柔爽悅可衆⁵³⁶

498 〔故〕一〔大〕 499 〔諸〕+〔大〕 500 〔謂〕+〔大〕 501
 〔界〕+〔鎌〕〔大〕 502 〔諸〕+〔大〕 503 著戒〓謂者非故依
 於〔大〕 504 〔取〕+〔鎌〕 505 初〓取〔大〕 506 〔謂初禪
 地〕+〔大〕 507 〔非想〕+〔鎌〕〔大〕 508 相〓想〔鎌〕、想
 地〔大〕 509 〔取〕+〔大〕 510 〔等〕+〔大〕 511 〔諸〕+
 〔大〕 512 〔謂〕+〔大〕 513 已〓己〔大〕 514 〔語〕一
 〔大〕 515 〔諸〕+〔大〕 516 〔著〕+〔鎌〕〔大〕 517 持〓持
 〔宮〕 518 恒〓恒〔鎌〕〔大〕 〔恒〕の右に見せ消ち記号、
 上方欄外に「涇」とあり。 519 〔謂〕+〔大〕 520 〔供養〕+
 〔鎌〕〔大〕 521 〔故〕+〔大〕 522 現〓觀〔鎌〕〔大〕 523
 〔又〕+〔大〕 524 〔勝妙〕+〔大〕 525 〔諸〕+〔大〕 526 〔又〕
 +〔大〕 527 現〓觀〔鎌〕〔大〕 528 〔所〕+〔鎌〕〔大〕 529
 生衆〓衆生〔鎌〕〔大〕 〔衆〕の右に見せ消ち記号あり。 530
 〔止〕一〔大〕 531 家力〓力家〔鎌〕〔大〕 532 〔說〕一
 +〔大〕 533 者〓者復〔鎌〕、復〔大〕 534 〔佛〕+〔鎌〕、〔謂〕
 +〔大〕 535 義〓美〔鎌〕〔大〕 536 說故〓說諸法故〔鎌〕、
 言語說法〔大〕 537 〔巧〕の右に「巧軟」とあり。 538 爽
 〓軟〔鎌〕〔大〕

- 341 心故。へ三者相成就、如經、生心已止。³³⁹舍利弗、不須復說故、
- 342 有法器衆生心已滿足故。へ四者堪成就、所有一切可但衆
- 343 生皆知如來成就希有勝妙⁵⁴⁰功德能說法故。⁵⁴¹如經、舍
- 344 利弗、佛所成就第一希有難解之法故。へ五者无量
- 345 種成就、說不可盡。如經、舍利弗、唯佛与佛說法、諸佛
- 346 如來能知彼法究竟實相故。言實相者、謂如來藏
- 347 法身之躰不變義故。へ六者覺躰成就、如來所說
- 348 一切諸法、⁵⁴²如來自證得故。如經、舍利弗、唯佛如來知
- 349 一切法故。へ七者隨順衆生意為說修行法成就、彼⁵⁴³
- 350 何等如是等故。如經、舍利弗、唯佛如來能說一切
- 351 法故。へ第一種種法門攝取衆生故。へ第二令不散亂住
- 352 故。へ第三令取故。へ第四令得解脫故。へ第五令彼修
- 353 行成就得對治法故。へ第六能令彼修行進趣成就。⁵⁴⁵へ第
- 354 七令得修行不退失故。此七種法、為諸衆生自身
- 355 所作善成就故。又与教化令得成就者、与二種法令
- 356 彼成就。何等為二。一・与證法。⁵⁴⁷二・与證說法。一与證
- 357 法⁵⁴⁸一令成就者、謂依證法而授与故。二与說法令成
- 358 就者、謂依說法而說与故法。⁵⁴⁹此二種法如向前說。依
- 359 此二種法⁵⁵⁰有何次第而得修行。即彼前文句再說⁵⁵¹（第十三紙）

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（淺野）

539 (生心已) 一【鎌】[大] 540 (妙) 一【大】 541 (能說
法) 一【三】[宮] 542 (唯佛) + 【鎌】[大] 543 (法) +
【鎌】[大] 544 (能) 一【鎌】[大] 545 (故) + 【鎌】[大]
補入記号の右に【國】とあり。546 (得) 一【鎌】[大] 547
〔證〕一【鎌】[大] 548 (一) 一【鎌】[大] 549 (法) 一
【鎌】[大] 550 (種) 一【大] 551 句再||重【大]

- 360 應知。又依證法有五種。⁵⁵² 〓一者何等法。二者云何〓。⁵⁵³ 三者何似法。四者何〓法。⁵⁵⁴ 五者何鉢法故。何等法者、謂聲聞法・辟支佛法・佛法故。⁵⁵⁵ 云何法者、謂起種種種種諸事說故。何似法者、依三種門得清淨故。何相法者、謂三種義
- 364 一相法故。何鉢法者、无二鉢故。无二鉢者、謂无量乘唯一佛乘、无二乘故。⁵⁵⁷ 復有義。⁵⁵⁸ 何等法者、謂有為法、无為法等。云何法者、謂曰緣法・非曰緣法等。何似法者、謂常法・无常法如是等。何相法者・謂生等三相法・不生等三相法。何鉢法者、謂五陰鉢・非五陰鉢。⁵⁶³ 又似何法者、謂无常法・有為法・曰緣法。又何相法者、謂可見相等法。又何鉢法者、謂五陰能取所取、以五陰是苦集鉢故、又五陰者是道諦鉢。⁵⁶⁷ 復有異義依說法。⁵⁶⁸ 何等法者、謂名・句・字身故。⁵⁷⁰ 云何法者、謂依如來所說故。⁵⁷¹ 何似法者、謂能教化衆生故。⁵⁷² 何相法有依音聲取故、以依音聲取彼法故。何鉢法者、諸假名鉢、法相義故。⁵⁷⁷ 〓自此已下、依三種義示現。一者決定義。二者疑義。三者依何事疑義、應當善知。決定義者、有聲聞方便證得深法作決定心、於聲聞

552 (復) + 鉢 [大] 553 (法) + 鉢 [大] 補入記号の右に「法」とあり。554 (相) + 鉢 [大] 補入記号の右に「相」とあり。上方欄外に「因」とあり。555 (諸) + 鉢 [大] 556 (種) - 鉢 [大] 557 (三) + 鉢 558 (又) + 鉢 [大] 559 (所) + [大] 560 (法) - [大] 561 (所) + [大] 562 (如是) - [鉢] [大] 563 (故) + [大] 564 似何〓何似 [鉢] [大] 565 (所) + [大] 566 所〓可 [大] 567 (故) + [大] 568 (說) + 鉢 [大] 569 (所) + [大] 570 (等) + [大] 571 (法) + 鉢 [大] 572 (可化) + 鉢 [大] 573 衆生〓者 [大] 574 有〓者 [鉢] [大] 575 (故) - [大] 576 諸〓謂 [鉢] [大] 577 補入記号の右に「論曰イ、或釋曰イ」と異本注記あり。578 依三種義示現〓次依示現三種義說 [大] 579 證得〓得證 [大] 580 於〓相 [三] [宣]

379 道中得方便涅槃證故。如是二種證法、示現有為・无
 380 為法故。如經、余時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢、
 381 乃至亦得此法到於炎故。⁵⁸¹疑義者、謂聲聞・辟支
 382 佛不能知故、是故生疑。如經、而今不知是義所趣故。依
 383 何事疑義者、聞如來說聲聞解脫我解脫不异是
 384 故生疑、謂生疑者生口中疑。此事云何。云何如來
 385 數數說於甚深境界、前說甚深・後說甚深、不
 386 同聲聞、如是等是故生疑。如經、余時舍利弗如四衆心
 387 疑、乃至而說偈言故。自此已下、示現依四種事說。
 388 一者決定心。二者回受記。三者取受記。四者与授
 389 記。應知。云何決定心。已生驚怖者令斷驚怖、以
 390 為利益二種人、是故知如來有決定心。此驚怖
 391 有五種應知。一者損驚怖、謂小乘衆生如聲聞○以
 392 為實、謗无大乘而作是言。如來說言阿羅漢果
 393 究竟涅槃。我畢竟取如是涅槃、是故羅漢不入炎。⁶⁰⁸
 394 如是驚怖故。二者多事驚怖、謂大乘衆生、如
 395 是心。⁶¹¹我於无量无边劫中行并行久受艱苦。
 396 以是念故生驚怖心、起取異乘心故。如是驚怖。一三
 397 者顛倒驚怖、謂心分別有我我所種種身、見不善法⁶¹⁷

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（淺野）

581 〔次第〕+〔大〕 582 炎 涅槃〔鎌〕〔大〕 583 〔言〕+
 〔大〕 584 〔諸〕+〔大〕 585 〔等〕+〔大〕 586 知故 得知
 〔大〕 587 〔與〕+〔鎌〕〔大〕 588 〔不別〕+〔大〕 589 〔此
 事〕+〔大〕 590 〔此以〕+〔大〕 591 說於 宣說〔鎌〕、為說
 〔大〕 592 〔以〕+〔大〕 593 〔等是〕一〔鎌〕〔大〕 594 如
 一 知〔鎌〕〔大〕 595 〔次第〕+〔大〕 596 〔故〕一〔大〕 597
 已下 以下 〔大〕、已〔宋〕〔元〕〔宮〕 598 示現依 次依示
 現 〔大〕 599 受 授 〔大〕 600 受 授 〔大〕 601 授 授 受
 〔鎌〕 602 〔當善〕+〔大〕 603 〔故〕+〔鎌〕〔大〕 604 〔知〕
 一 〔鎌〕〔大〕 605 有 者 〔大〕 606 聲聞 所聞聲取 〔鎌〕
 〔大〕 補入記号の右に「取」とあり。 607 而作是言 起如是
 心 〔大〕 608 炎 涅槃 〔鎌〕〔大〕 609 〔故〕一〔鎌〕〔大〕
 610 生 聞菩薩道劫數長遠種種苦行起 〔大〕 611 〔佛道長
 遠〕+〔大〕 612 并 菩薩 〔鎌〕〔大〕 613 勲 勤 〔大〕 614
 以 如 〔大〕 615 〔以是故〕+〔大〕 616 〔故〕一〔大〕 617
 見 見 諸 〔大〕、現 諸 〔三〕〔宮〕

- 398 故。⁶¹⁸如是驚怖。〱四者心悔驚怖、悔驚怖者、謂大德舍利
- 弗等起如是心言。我應證於如是小乘之法。如
- 400 是悔已心怖自止、即此悔心名為驚怖。是義
- 401 應知。我〱五者誑驚怖、謂增上慢聲聞之人作如是
- 402 心。云何如來誑我等。如是驚怖故。回受記者、如經、心
- 403 心舍利弗、不須(復)⁶²⁹說。若說是事、一切世間諸天人等
- 404 皆生驚怖故。以回授記皆生驚怖者有三種義。
- 405 一者欲令彼諸大推覓甚深妙境界故。二者欲令
- 406 大衆尊重心、畢竟欲聞如是說故。三者為令諸
- 407 增上慢聲聞之人捨離法坐而起去故。第二請
- 408 者、示現過去无量諸佛教化衆生。如經、是會無數、
- 409 乃至聞佛所說、則能驚敬信故。第三請者、示現
- 410 今現在佛教化衆生。如經、今此會中如我等比、乃
- 411 至長夜安隱多所饒故。取受記者、以舍利弗
- 412 等欲得授記。如經、佛告舍利弗。汝以三請、豈得
- 413 不說。汝今諦聽如是等故。与受記者、有六種應知。
- 414 〱一者未聞令聞。〱二者說。〱三者依何等義。〱四者令住。〱五
- 415 者依法。〱六者遮。未聞令聞者、如經、舍利弗、如是妙
- 416 法、諸佛如來時乃至說之、如憂曇花如是等故。

618 〔故〕一〔大〕 619 〔悔驚怖者〕一〔鎌〕〔大〕 620 應
證於〱不應證於〔鎌〕、不應修證〔大〕 621 怖〱即鎌
〔大〕 622 悔心〱心悔〔大〕 623 是〱此〔鎌〕〔大〕 624
〔我〕一〔鎌〕〔大〕 625 作〱起〔大〕 626 〔於〕+〔鎌〕
〔大〕 627 〔故〕一〔鎌〕〔大〕 628 受〱授〔大〕 629 心心
〱止止〔鎌〕〔大〕 630 〔復〕の左に見せ消ち記号、右に
〔復〕とあり。 631 以〱此〔鎌〕〔大〕 632 推覓〱衆推覓
〔鎌〕、衆推求〔大〕 633 〔彼諸〕+〔鎌〕〔大〕 634 〔生〕+
〔鎌〕〔大〕 635 是〱來〔鎌〕〔大〕 〔是〕の左に見せ消ち記
号、右に〔來〕とあり。 636 為〱欲〔鎌〕〔大〕 637 坐〱
座〔鎌〕〔大〕 638 〔次第〕+〔大〕 639 能驚〱能〔鎌〕、生
〔大〕 640 〔現在〕一〔鎌〕〔大〕 641 〔次第〕+〔大〕 642
〔益〕+〔鎌〕〔大〕 643 受〱授〔鎌〕〔大〕 644 以〱已〔鎌〕
〔大〕 645 受〱授〔鎌〕〔大〕 646 〔有〕一〔大〕 647 今聞
者〱者令聞〔大〕〔宮〕 648 〔至〕一〔鎌〕〔大〕 649 憂曇
花〱優曇鉢華〔鎌〕〔大〕

- 417 說者、如經、舍利弗、我以無數方便、種種曰緣・譬喻
 418 言辭、演說說諸法。如是等。種種曰緣者、所謂三乘。
 419 彼三乘者、唯名字章句言說、非有實義、以彼實 (第十五紙)
 420 義不可說故。依何尋義者、如經、舍利弗、諸佛世
 421 尊唯以一大事曰緣故出現於世。如是等故。彼一
 422 大事者、依四種義應知。何尋為四。一者无上義、
 423 唯除如來一切智智、更無餘事。如經、欲開佛知見、
 424 令衆生如得清淨故、出現於世。佛知見者、如來能
 425 證以如實智知彼義故。二者同義、以聲聞・辟支佛・
 426 佛法身平等故。如經、欲示衆生佛知見故、出現
 427 於世。法身平等者、佛性・法身更無差別故。三者
 428 不知義、以一切聲聞・辟支佛等、不能知彼真實處
 429 故。不知真實處者、不知究竟唯一佛乘故。如經、
 430 欲令衆生悟佛知見故、出現於世。四者為令證不
 431 退轉地、示現欲与无量无智業故。如經、欲令衆
 432 生入佛知見故、出現於世。又示者、為諸菩薩有疑心
 433 者、令知如實修故。又悟入者、未發菩提心者令發
 434 心故、已發心者令入法故。又復悟者、令外道衆生
 435 覺悟故。又復入者、令得聲聞果者入大菩提故。令

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻(淺野)

650 (説) 一 [鎌] 大 [説] の右に見せ消ち記号あり。
 651 (故) + [鎌] 大 652 (有) + [鎌] 大 653 (彼) 一 [大]
 654 (當善) + 大 655 智 || 知 大 656 如 || 智 [鎌]、知
 大 657 (故) + [鎌] 大 658 (以) 一 [鎌] 659 (智)
 一 [鎌] 大 660 (深) + 大 661 以 || 謂諸 大 662
 (故) 一 大 663 (故) + [鎌] 大 664 (更) 一 [大]
 665 以一切 || 謂諸 大 666 (此言) + 大 667 (故) +
 [鎌] 大 668 (入義) + [鎌] 669 (為) 一 [大] 670
 (无) 一 [鎌] 大 671 (故) + [鎌] 大 672 庵点の右に
 「才二番尺示悟入三」とあり。673 (復) + [鎌] 大 674
 (行) + [鎌] 大 675 (菩提) 一 [大] 676 庵点の右に
 「才三番尺悟入二」とあり。677 (生) + [鎌] 大 678 (小
 悉) + [鎌] 大 679 (大) 一 [大]

- 436 住者、如經、舍利弗、但以一佛乘故、為衆生說法。⁶⁸⁰ 依
 437 法者、如經、舍利弗、過去諸佛、以无量無數方便、
 438 種種譬喻・回緣念觀、方便說法、是法皆為一佛
 439 乘故如是等故。言辭喻者、如依牛有乳・酪・生糝・
 440 糜糲⁶⁸⁴乃至提提⁶⁸⁵為第一、小乘如乳。大乘如提醐⁶⁸⁷故。
 441 此譬喻明大乘无上、諸聲聞等名同大乘无上義
 442 故。聲聞同者、此中示現諸佛如來法身之性、同諸
 443 凡夫・聲聞・辟支佛等、法身平等无有差別故。此
 444 譬喻示現回緣之義、如向所說。念言觀者、於小
 445 乘⁶⁹⁵謗中人无我等。於大乘⁶⁹⁷傍中真如・法身界・實
 446 際・人无我・法无我等種種⁶⁹⁹觀故。言方便者、於小
 447 乘中現陰界入、厭苦離苦得解脫故。於大乘中諸
 448 波羅蜜、以四攝法攝取自身他身、利益對治
 449 法故。遮者、如經、舍利弗、十方世界中、尚无二乘、何
 450 况有三。如是等故。无二乘者、謂无乘所得涅槃、
 451 唯佛⁷⁰³如來證大菩提、究竟滿足一切智惠名大涅槃、
 452 非諸聲聞・辟支佛業等有⁷⁰⁶辦法、唯一佛乘故。一佛乘
 453 者、依四種義說、應知。如來依此六種⁷⁰⁹受記、是故
 454 前說何等法・云何法・何似法・何相法・何鉢法、如

680 (故) + 鎌 [大] 681 觀 || 觀 [大] 682 辭 || 譬
 [鎌] [大] 683 (故得) + [大] 684 乃 || 及 [大] [宮] 685
 至提提為 || 至醍醐醍醐為 [鎌]、以醍醐此五味中醍醐 [大]
 補入記号の右に「酬欸」とあり。 686 如 || 不如其猶如 [大]
 687 如提醐故 || 如醍醐故 [鎌]、為最猶如醍醐 [大] 688 譬
 喻 || 喻所 [大] 689 (乏人) + [大] 690 (有) [一] [鎌] [大]
 691 (義皆是) + [大] 692 向 || 前 [大] 693 念言觀 || 言念
 觀 [鎌] [大] 694 (於) [一] [鎌] [大] 695 謗 || 諦 [鎌] [大]
 [大] 696 (於) [一] [鎌] [大] 697 傍 || 諦 [鎌] [大] 698
 法身界實際 || 法界實際 [鎌]、實際法界法性及 [大] 699 視
 || 觀 [鎌] [大] 700 現 || 觀 [鎌] [大] 701 (以) [一] [鎌]
 702 (三) + 鎌 [大] 703 佛 || 有 [大] 704 惠 || 慧 [鎌]
 [大] 705 (業) [一] [鎌] [大] 706 卍 || 涅槃 [鎌] [大]
 707 (說) [一] [鎌] 708 (當善) + [大] 709 受 || 授 [鎌]
 [大]

- 455 是示現。何等法者、謂未曾聞法故。云何法者、謂種
 456 種言悟譬喻說故。何似法者、為一大事故。何相法
 457 者、為隨衆生器說佛諸法故。何躡法者、唯一乘躡
 458 故。一乘躡者、謂謂諸佛如來平等法身。彼諸聲聞・
 459 辟支佛乘非彼平等法身之躡、以因果行覓不
 460 同故。自此已下、如來說法為斷四種疑應知。何等
 461 四種。一者・何時說。二者・云何知是增上慢人。三者・
 462 云何堪說。四者・云何如來不成妄語。何時說者、
 463 諸佛如來於等時發起種種方便說法為斷彼
 464 疑。如經、佛告、舍利弗、諸佛出於五濁惡世、謂劫濁⁷³²
 465 等故。云何知是增上慢者、如來不為增上慢人
 466 說法、云何知彼是增上慢。為斷彼疑故、如經者、
 467 若有比丘實得阿羅漢者、若不信是法、无有是
 468 處等故。云何堪說者、從佛門法而起謗心。云何
 469 如來不成不堪說法人。為斷此疑、如經、除佛滅
 470 度後、現前无佛。如是等故。云何如來不成妄語者、
 471 是以如來先說異・今說法異、云何如來不成妄語。
 472 為斷此疑、如經、舍利弗、汝等當一心信解受持
 473 語、諸佛如來言无虚妄、无有餘乘、唯一佛乘故。

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻(淺野)

710 (法)一【鎌】(大) 711 悟〓辟【鎌】(大) 712 (顯)
 +【大】 713 (唯)〓鎌、(所謂唯)〓大) 714 佛諸〓諸佛
 【鎌】(大) 715 (所謂)〓大) 716 (有)〓大) 717 謂〓
 所)〓大、(謂)〓鎌) 718 (謂)の左に見せ消ち記号あ
 り。 719 覓〓觀【鎌】(大) 720 已〓以【大】 721 (心)〓
 【鎌】(大) 722 種〓疑(大) 723 者〓者疑【鎌】、疑(大)
 724 者〓者疑【鎌】、疑(大) 725 者〓者疑【鎌】、疑(大)
 726 者〓者疑【鎌】、疑(大) 727 (何)〓鎌【大】 728
 (發)〓大) 729 彼〓此【大】 730 (佛告)〓大) 731
 (所)〓鎌【大】 732 (如是)〓大) 733 (入)〓大) 734
 說法〓而說諸法【大】 735 彼疑故〓彼疑【鎌】、此疑(大)
 736 (者)〓一【鎌】(大) 737 是〓此【鎌】 738 (如是)〓
 (大) 739 門〓開【鎌】(大) 740 云何如來〓如來應是不堪
 說人云何【大】 741 (法)〓一【大】 742 是〓此【鎌】(大)
 743 (法)〓鎌【大】 744 (應)〓大) 745 (佛)〓鎌【大】

- 474 乃至童子戲聚沙為佛（塔）⁷⁴⁶塔、如是諸人等
- 475 皆已成佛道者、謂支菩提心行菩薩心者、所作善
- 476 根能證菩提、非諸凡夫及決定聲聞本來未支749
- 477 菩提心者之所能得故。如是乃至小低頭等、751 彘智是。752
- 478 譬喻品第三（第十七紙）
- 479 舍利弗說偈。金匱三十二、十力諸解脫、○而不得此756
- 480 事。八十種妙好、十八不共法、如是諸功德、而我皆以失。758
- 481 論曰、此偈示現何義。舍利弗自呵責身言、我
- 482 不見諸佛・不乘往所及聞佛說法、不供養恭敬
- 483 諸佛、无利益衆生事、於未得法退是不故。舍利
- 484 弗作如是等呵嘖自身。不見佛者、不見諸佛766
- 485 如來大人之相、不生恭敬供養心故。不往佛所者、
- 486 示現教化衆生力故。放金匱光明者、示現見佛
- 487 自身異身獲得无量諸佛功德故。聞說法者、
- 488 示現能作利益一切衆生故。770 力者、示現衆生有疑、依
- 489 十力斷疑故。供養者、示現能教化衆生力故。十八
- 490 不共法者、示現遠離諸鄣導故。恭敬者、示現出
- 491 生无量福德、依如來教得解脫故。以人无我乘法
- 492 无我法无我、一切諸法悉平等故。777 是舍利弗自呵嘖778

746（塔）一「鎌」一「大」一「塔」の左下に見せ消し記号あり。747 支 發「鎌」一「大」一「支」の左に傍線、右に「發」とあり。748 心 行「鎌」一「大」 749 支 發「鎌」一「大」の左に傍線、下方欄外に「發」とあり。750（故）一「大」 751（皆）+「鎌」一「大」 752 智 如「鎌」一「大」一「智」の右に見せ消し記号、上方欄外に「如」とあり。753（尊者）+「鎌」一「大」 754（而）+「鎌」、（所）+「大」 755（言）+「鎌」一「大」 756（同共一法中）+「鎌」一「大」補入記号の右に「同共一法中」と異本注記あり。757 諸 等「鎌」一「大」 758 以 已「大」 759 論 釋「大」 760（尊者）+「大」 761 呵 阿「鎌」 762 乘 往 往 佛「鎌」、往 諸 佛「大」 763 是不故 是故「鎌」、（是不故）一「大」 764（尊者）+「大」 765 嘖 責「鎌」一「大」 766（示現）+「鎌」一「大」 767（不）一「大」 768（佛）一「鎌」一「大」 769（利益）一「大」 770（之利益）+「大」 771（種）+「大」 772（彼）+「大」 773 以 證「鎌」 774（乘法无我）一「鎌」、乘法无我 及「大」 775（皆）+「大」 776（故）一「大」 777 是 是 故「鎌」、是 故 尊 者「大」 778 嘖 責「鎌」一「大」

- 493 身言。我未得如法是相。⁷⁷⁹未得中退故。⁷⁸⁰自此已不、⁷⁸²為⁷⁸³ 784
- 494 七種具足煩惱深性衆生、說七種譬喻、對治七
- 495 種增上慢心、此義應知。又三種染慢无煩惱人
- 496 三味解脫見等染慢、對治此故說三種平等。此義應
- 497 知。何者七種具足煩惱性人。一者求勢人。⁷⁹⁰二者求
- 498 耳耳解脫人。三者大乘人。四者有定人。五者无定人。
- 499 六者集功徳人。七者不集功徳人。何等七種增上慢
- 500 心。○何七種譬喻對治。一者顛倒求諸功徳增上慢
- 501 心、○世謂閻中諸煩惱識然增上、而求天人勝妙境界
- 502 有漏果報。對治此故、說火宅譬喻應知。二者耳耳
- 503 人一向決定增上慢心、自言我乘与如来乘等无
- 504 差別、如是顛倒取。對治此故、說窮子譬喻應知。
- 505 三者大乘人一向決定增上慢心、起如人意。无別
- 506 耳耳⁸⁰⁵・辟支佛乘、如是顛倒取。對治此故、說雲雨譬
- 507 喻應知。四者實无而有增上慢心、以有世間三昧（第十八紙
- 508 三摩拔提、實无涅槃而生涅槃想、如是顛倒取。⁸¹¹
- 509 對治此故、說佗城譬喻應知。五者鼓亂增上心、實
- 510 无有定、過去雖有大乘善根而、不求大乘如是、於⁸¹⁵
- 511 殊⁸¹⁶（劣）⁸¹⁷心中生虚妄解以為第一乘、如是倒取。對治此說⁸¹⁹

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻（淺野）

779 法是相 是法 鎌、是法故 大 780 (於) + 鎌
 大 781 (故) - [宋] [元] [宮] 782 已 以 大 783
 不 下 大 784 (次) + 大 785 深 染 鎌 大 786
 の左に見せ消ち記号あり、上方欄外に「染」とあり。
 [譬] 一 大 787 (復次爲) + 大 788 見 身 大 789
 (有身字本) + 大 790 性人 染性衆生 大 791 (力) +
 鎌 大 792 耳耳 聲聞 鎌 大 793 (求) + 鎌
 794 (云) + 鎌 大 上方欄外に「云」とあり。 795 世謂
 謂世 鎌 大 謂 の右下の墨付は倒置符か。 796 識
 染熾 鎌 大 797 (如是倒取) + 鎌 798 (爲) + 鎌
 大 799 耳耳 聲聞 鎌 大 800 (人) - 大 801
 (顛) - 鎌 大 802 (爲) + 鎌 大 803 (人) -
 大 804 決 次 鎌 805 耳耳 聲聞 鎌 大 806
 (顛) - 鎌 大 807 (爲) + 鎌 大 808 而 謂
 鎌 大 809 拔 跋 鎌 大 810 (而) - 鎌 大
 811 (顛) - 鎌 大 812 (爲) + 鎌 大 813 (慢) +
 鎌 大 814 「心」の右に「慢」とあり。 814 (不覺知不覺知
 故) + 鎌 大 815 (如是) - 鎌 大 816 於殊 狭
 鎌 大 817 (劣) の右に見せ消ち記号、上方欄外に
 「劣」とあり。 818 以為 爲 鎌、謂 大 819 (故) +
 鎌 大

- 512 繫寶珠譬應知。⁸²⁰ 六者實有功德增上慢心、聞說⁸²¹
- 513 大乘佛法第一乘對治此而取非大乘、如是倒取。對治
- 514 此故、說王解譬中明珠⁸²³與之譬喻應知。七者實无
- 515 功德增上慢心、於第一乘不曾彼集諸善根故、⁸²⁶
- 516 聞說第一乘心中不取以為第一、如是倒取。對治此
- 517 故、說醫師譬喻應知。第一人者、以世間中種種善根⁸²⁹
- 518 三昧功德方便令喜、然後令人入大乘涅槃故。第二
- 519 人者、以三為一、令人入大乘故。第三人者、令知種種乘諸⁸³²
- 520 佛如來平等說法、隨法諸眾生善根種子而生牙⁸³⁴
- 521 故。第四人者、方便令人入涅槃城。⁸³⁵ 真城者、所謂諸禪
- 522 三昧城。⁸³⁷ 過彼城已、然後令人入般涅槃城故。第五人
- 523 者、示現過去所有善根、令憶念已、然後教令人入三
- 524 昧。故。第六人者、說大乘法、以此法門同十地行滿、諸佛
- 525 如來蜜與授記故。第七人者、根未焚為令焚故、如⁸⁴¹
- 526 如是示現得涅槃量。為是義故、如來說此種譬喻。⁸⁴²
- 527 何者三種無煩惱人三種染慢。所謂三種顛倒信故。⁸⁴⁵
- 528 何等為三。一者信種種乘異。二者信世間涅槃異。三
- 529 者信彼此身異。為對治此三種染慢、故說三種平
- 530 等應知。何者名為三種平等。云何對治。一者乘平

820 (喻) + 鎌 [大] 821 (說) - 鎌 [大] 822 (第一乘對治此而) - 鎌 [大] 823 說王解譬為說王解 [鎌]、為說輪王解自 [大] 824 殊 || 珠 [鎌] [大] 825 彼 || 修 [鎌] [大] 826 集 || 習 [三] [宮] 827 故 || 本 [大] 828 (說) - 鎌 [大] 829 (為) + 鎌 [大] 830 以 || 示 [鎌] [大] 831 (乘) - 鎌 [大] 832 (異) + 鎌 [大] 833 (法) - 鎌 [大] 834 牙 || 芽 [鎌] [大] 835 (故) + [鎌] [大] 836 真 || 涅槃 [鎌] [大] 837 (故) + [大] 838 彼 || 後記号、右に「涅槃」とあり。 839 (般) - 鎌 [大] 840 現 || 其 [鎌] [大] 841 蜜 || 密 [鎌] [大] [三] 842 (淳) + 鎌 [大] 843 (如) - 鎌 [大] 844 此 || 此七 [鎌] [三] [宮]、七 [大] 845 者 || 等 [鎌]

- 531 等、謂与聲聞授菩薩記、唯有大乘无二乘故、是乘平⁸⁴⁷
- 532 等无差別故。二者世間辨平等、以多寶如來入於辨、世⁸⁴⁹
- 533 間・涅槃彼此平等无差別故。三者身平等、多寶如⁸⁵⁰
- 534 來已入辨、復示現身、自身他身平等无差別故。如是⁸⁵¹
- 535 三種无煩惱人染惱之心、見彼此身所作差別、以不⁸⁵²
- 536 知彼此佛性法身悉平等故、即謂彼人我證此法。⁸⁵³
- 537 彼人不得此對治故、与諸聲聞授應知。彼聲聞菩薩、(第十九紙⁸⁵⁴
- 538 為實成佛故与授記。為不成佛與授記也。若實成⁸⁵⁵
- 539 佛者、菩薩何故於无量劫修集无量種種功德。若不⁸⁵⁶
- 540 成佛者、云何虚妄授記。彼聲聞等得授記者、得決定心、非⁸⁵⁷
- 541 成就法性故如來。依彼三種平等說一乘法故、以如來⁸⁵⁸
- 542 法身・与彼聲聞法身平等无量故与授記、非即⁸⁵⁹
- 543 具足修行功德。故是菩薩功德具足、諸聲聞人功德未⁸⁶⁰
- 544 具足。言授記者、有六處示現、五者是如來記、一者⁸⁶¹
- 545 菩薩記。如來記者、謂舍利弗摩訶迦葉亦(衆)所知⁸⁶²
- 546 識故、名号不同故與別記。富樓那等五百人千二⁸⁶³
- 547 百人等同一名故、俱時与記。与學无學等俱同⁸⁶⁴
- 548 一号、又復非衆所知識、故一時與記。与菩提婆⁸⁶⁵
- 549 達多記者、示現如來无怨惡故。与比丘丘及諸⁸⁶⁶

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻(淺野)

846 薩提【大】「薩」の右に見せ消ち記号、左に傍線、上方欄外に「提」とあり。847 有「一」【大】848 辨涅槃【大】849 辨涅槃【大】850 辨涅槃【大】851 (身)一【三】【宮】852 (法身)【大】853 (以)一【大】854 即謂彼謂即此【大】855 (故)【大】856 此對治對治此【大】857 (記)【大】858 (問)【大】859 菩薩【大】860 也耶【大】861 (者)一【大】862 (者)一【大】863 (與之)【大】864 (答)【大】865 (謂聲聞)【大】866 (故)一【大】867 (故)一【大】868 如來佛【大】869 (与彼)一【大】870 量異【大】871 故是是故【大】872 (具)一【大】873 (有)一【大】874 六加【大】875 者是如來是佛【大】876 (者)一【大】877 摩訶摩訶【大】878 ホ等【大】879 (衆)の右に見せ消ち記号、下方欄外に「等」とあり。880 (故)一【大】881 與別【大】882 (入)一【大】883 (与)一【大】884 俱皆【大】885 (是)【大】886 一時同【大】887 (与善)【大】888 (授別)【大】

550 天女記者、示現女人在家出家修菩薩行者皆證⁸⁸⁹

551 佛果故。菩薩授記者、如不輕菩薩品示現應知。禮拜⁸⁹¹

552 讚嘆言、我不輕汝、汝亦等皆當作佛者、示現衆生皆⁸⁹⁵

553 有佛性故。言聲聞受記者、聲聞有四種。一者決定聲⁸⁹⁹

554 聞。二者增上慢聲聞。三者退菩薩心聲聞。四者應化聲⁹⁰⁰

555 聞。二種聲聞如來与授記、謂應化聲聞・退已還發菩薩心⁹⁰²

556 者。決定・増上慢二種聲聞、根未焚故如來不与授記、⁹⁰⁴

557 菩薩与授記。菩薩与授記者、方便令皮菩薩心故。又依⁹⁰⁵

558 何義故、如來說三乘名為一乘。依同義故、与諸⁹⁰⁸

559 聲聞大菩薩授記。同義者、以如來法身・聲聞法身平⁹¹²

560 等无差別故。以諸聲聞辟支佛異乘故有差別、以彼⁹¹³

561 二乘非所大乘故、如來說言不離我身是无上義、⁹¹⁵

562 一切聲聞辟支佛法中不說此義、以其不能如實解⁹¹⁶

563 故。以是義故、諸菩薩等行菩薩行非為虛妄。无上⁹¹⁷

564 義者、自餘殘修多羅明无上義、无上義有十⁹¹⁸

565 種、應知。一者示現種子无上故、説雲、雨譬喻。汝等⁹²¹

566 所行是菩薩道者、謂發菩薩心退已還發、前所修行⁹²²

567 善根不滅・同後得果故。二者示現明行无上故、説⁹²³

568 大通智勝如來本事等故。三者示現增長力⁹²⁴

889 [授佛] + 大 890 (者) 一 [大] 891 (與授記) + 大

892 [授] 一 [大] 893 (下) + 大、(下文 + 三) [宮]

894 (中) + 大 895 嘆口歎作如是 [大] 896 ホ二 [等] [鎌]

[大] 897 (得) + 鎌 [大] 898 現口諸 [鎌] 899 受口人

得授 [鎌] [大] 900 薩口提 [鎌] [大] 薩の左に見せ消

ち記号、上方欄外に「提」とあり。901 (与) 一 [鎌] [大]

902 聲聞口者 [鎌] [大] 903 薩口提 [鎌] [大] 薩の左

に見せ消ち記号、下方欄外に「提」とあり。904 (若) +

[大] 905 (者) + [大] 906 (者) + [大] 907 (如來) 一

[大] 908 (應化聲聞是) 大 + [三] 909 (菩薩与授記) 一

[大] 910 皮口發 [鎌] [大] 911 薩口提 [鎌] [大] 薩

の左に見せ消ち記号、下方欄外に「提」とあり。912 (故)

一 [鎌] [大] 913 如來口佛 [鎌] [大] 914 与口授 [鎌]

[大] 915 薩授口提 [鎌] [大] 薩の左に見せ消ち記号、

上方欄外に「提」とあり。916 (言) + 鎌 [大] 917 如來

口佛 [鎌] [大] 918 (彼此) + 鎌 [大] 919 異乘口等乘

不同 [大] 920 (所) 一 [鎌] [大] 921 (等二乘) + 鎌

[大] 922 (自) 一 [鎌] 923 殘修多羅口經文 [大] 924

(者略) + 鎌 [大] 925 (此義) + 鎌 [大] 926 (何等為

士) + 鎌 [大] 927 (雲) 一 [大] 928 薩口提 [鎌] [大]

[薩] の左に見せ消ち記号、上方欄外に「提」とあり。929

(者) + 鎌 [大] 930 明口修 [鎌]、(明) 一 [大] 931

(故) 一 [鎌] [大]

- 569 无上故、説商主譬喻。四者示現令鮮无上故、説繫
 570 寶珠譬喻。五者示現清淨國王无上故、示現
 571 多寶如来塔。六者示現説无上故、説譬申明珠譬
 572 喻。七者示現教化衆生无上故、地中踊出无量菩
 573 薩摩訶薩等故。八者示現成大菩薩无上故、示現三種
 574 佛菩薩。一者應化佛菩薩、隨所應〇見而為示現故、如
 575 經、皆謂如来出尺氏宮、去出伽耶城遠、坐於道場得阿
 576 耨多羅三藐三菩薩故。二者報佛菩薩、十地行滿足
 577 得常辨證故、如經、善界子、我實成佛已來无量
 578 无边百千万億那由他劫故。三者法佛菩薩、謂如来
 579 藏性淨拏常恒清涼不變故、如經、如来如實知見
 580 三界之相、乃至不如三界見於三界故。三界相者、謂
 581 衆生界即拏界、不離衆生界有如來藏故。无有生
 582 死若有若出者、謂常恒清涼不反義故。亦无在
 583 世及滅度者、謂如来藏真如之鉢、不即衆生界・
 584 不離衆生界故。非實〇虚非如非真者、謂離四
 585 種故、有有四种相者、是无常故。不如三界見於三界
 586 者、如來能見能證真如法身、凡夫不見故。是故經
 587 言如来現見无錯謬故。我本行菩薩道今猶未滿者、

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻（浅野）

932 〔鮮〕+〔鎌〕〔大〕 933 踊〇涌〔鎌〕〔三〕〔宮〕 934
 〔故〕一〔鎌〕〔大〕 935 薩〇薩〇薩〇の左に見
 せ消ち記号、右に傍線、上方欄外に「提」とあり。 936 故
 〇者〔鎌〕 937 薩〇提〔鎌〕、提故〔大〕「薩」の左に見せ
 消ち記号、上方欄外に「提」とあり。 938 〔示現〕+〔大〕
 939 〔化〕一〔大〕 940 薩〇提〔鎌〕〔大〕「薩」の左に見せ
 消ち記号、右に「提」とあり。 941 補入記号の右に「應」
 とあり。 942 〔故〕一〔鎌〕〔大〕 943 〔出〕一〔鎌〕〔大〕
 944 〔不〕+〔鎌〕〔大〕 945 〔成〕+〔大〕 946 薩〇提〔鎌〕
 〔大〕「薩」の左に見せ消ち記号、上方欄外に「提」とあり。
 947 〔示現〕+〔大〕 948 薩〇提〔鎌〕〔大〕「薩」の左に見せ
 消ち記号、下方欄外に「提」とあり。 949 拏〇涅槃〔鎌〕
 〔大〕 950 界〇男〔鎌〕〔大〕 951 〔示現〕+〔大〕 952 薩〇
 提〔鎌〕〔大〕「薩」の左に見せ消ち記号、下方欄外に「提」
 とあり。 953 拏〇涅槃〔鎌〕〔大〕 954 故〇義故〔鎌〕、尋
 義〔大〕 955 〔次第〕+〔大〕 956 拏〇涅槃〔鎌〕〔大〕 957
 有〇退〔鎌〕〔大〕 958 反〇變〔鎌〕〔大〕 959 〔非〕+〔鎌〕
 〔大〕補入記号の右に「非」とあり。 960 真〇異〔鎌〕〔大〕
 961 故〇相〔鎌〕〔大〕 962 〔有〕一〔鎌〕〔大〕「有」の右
 に見せ消ち記号あり。 963 〔謂佛〕+〔鎌〕〔大〕 964 現〇明
 〔鎌〕〔大〕 965 〔有〕+〔大〕

- 588 以本願故、衆生界未盡、願非究竟故。言未滿、
 者非謂菩薩不滿足不滿足。所成壽命後倍上
 589 數者、此文宗示現如來常命、巧方便顯多數、過
 590 上數量不可數知故。我淨土第一義諦之所攝故
 591 不毀而衆見燒盡者、報佛如來真實淨土第一
 592 義諦之所攝故。九者示現无无上故、說醫師譬
 593 喻。十者示現勝妙力无上故、自餘殘修多羅說示
 594 現應知。多寶如來塔顯一切佛土清淨者、示現
 595 諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故。示現
 596 有八種。一者塔。二者量。三者略。四者住持。五者示現（第二十一紙）
 597 无量佛。六者離穢。七者多寶塔。八者同一塔坐。者、
 598 示現如來舍利住持故。量者、方便示現一切佛國土
 599 清淨莊嚴、是出世間无漏善根所生、非世間
 600 有漏善根所生故。略者、多寶如來身一鉢示現攝
 601 取一切佛法身故。住持者、示現諸佛如來法身自
 602 在○故力。示現无量佛者、示○彼此所作諸業无差別
 603 故。遠離穢不淨者、示現一切諸佛國土平等清淨
 604 故。言（多）寶者、示現一切佛國土同實性故。同一塔坐
 605 者、示現佉佛、法報報佛等皆為成大事故。自此已

966 (者) 一 [鎌] [大] 967 薩 薩 提 [鎌] [大] 薩 の左
 に見せ消ち記号、上方欄外に「提」とあり。968 不満足 〓
 也 [鎌] [大] 969 後 〓 復 [鎌] [大] 970 (宗) 一 [鎌]
 [大] 971 常命 〓 命常 [大]、常念 [宮]、底本と [宗] は一
 致。972 (善) + [鎌] [大] 973 (故) + [大] 974 (故) 一
 [大] 975 (第一義諦之所攝故) 一 [鎌] [大] 976 矣 〓 涅
 槃 [鎌] [大] 977 (自) 一 [鎌] 978 殘修多羅說 〓 經文
 [大] 979 顯示 〓 示現 [大] 980 諸 〓 說 [三] [宮] 981
 衆 〓 諸 [大] 982 (種) 一 [鎌] [大] 983 (塔) 一 [鎌]
 [大] 984 (塔) + [鎌] [大] 985 (國) 一 [鎌] [大] 986
 [清淨] + [大] 987 (是) + [大] 988 (之) + [大] 989 (所)
 一 [鎌] 990 故 〓 也 [大] 991 (示現) + [鎌] [大] 992
 如來 〓 佛 [大] 993 (示現) 一 [鎌] [大] 994 佛 〓 諸佛眞
 [大] 995 故力 〓 力故 [鎌] [大] 「力」の右に見せ消ち記号
 あり。996 (現) + [鎌] [大] 上方欄外に「現」とあり。997
 [不淨] 一 [大] 998 (言) 一 [鎌] [大] 999 (多) の左
 に見せ消ち記号、上方欄外に「多」とあり。1000 (諸) +
 [大] 1001 (國) 一 [鎌] 1002 實 〓 寶 [鎌] 1003 (非化佛)
 + [鎌] [大]

- 607 下、示現¹⁰⁰⁴○力・持力¹⁰⁰⁵・修行力應知。法力者、五種門示現。
- 608 一者證¹⁰⁰⁷。二者住¹⁰⁰⁸。三者供養¹⁰⁰⁹。四者聞法¹⁰¹⁰。五○誦讀持說
- 609 四種門¹⁰¹²。旃勤品中示現一法門¹⁰¹¹、常精進菩薩品中示
- 610 現¹⁰¹⁵。旃勤品中四種門者¹⁰¹⁷。一者證聞¹⁰¹⁸、如經、我說是如來
- 611 壽命長遠、時六百八十万億那由他恒河沙衆生、
- 612 得无生法忍故。此言无生法忍者¹⁰²⁰、謂初地證智
- 613 應知。八生乃至一生得阿耨¹⁰²¹○羅三藐三菩薩者¹⁰²²、謂
- 614 證初地菩薩故。八生一生○者¹⁰²⁴、謂諸凡夫決定能證初
- 615 地¹⁰²⁵。隨力隨分、八生乃至一生證初地故。言阿耨¹⁰²⁶(多)
- 616 羅三藐三菩薩者¹⁰²⁹、以離三界中分¹⁰³⁰(段)生死、隨分能
- 617 見如真如佛性名得菩薩¹⁰³³、非謂究竟滿足如來
- 618 方便辨故¹⁰³⁴。二是信者¹⁰³⁵、如經、復有八世界微塵衆
- 619 生、皆起阿耨多羅三藐三菩薩心故¹⁰³⁸。三・供養者¹⁰⁴⁰、如
- 620 經、是諸菩薩摩訶薩法得大利時¹⁰⁴¹、於虛空中中雨
- 621 曼陀羅花如是等故¹⁰⁴³。四・聞法者¹⁰⁴⁴、應如隨喜品¹⁰⁴⁶
- 622 說應知。一法門常精進菩薩品示現者¹⁰⁴⁸、諸讀¹⁰⁴⁹(解)¹⁰⁵⁰
- 623 說書寫等¹⁰⁴⁷、得六根清淨故¹⁰⁵¹。如經、若善男子・善男
- 624 女人、受持法花經¹⁰⁵³、若誦誦¹⁰⁵⁴・若解說¹⁰⁵⁵・若書寫¹⁰⁵⁶、是人
- 625 當得八百眼功德¹⁰⁵⁵、乃至千二百意功德故¹⁰⁵⁷。以此得¹⁰⁵⁸

興聖寺一切經本『妙法蓮華經憂波提舍』解題・翻刻(淺野)

1004 (法+鎌)〔大〕上方欄外に「法」とあり。1005 (持力+鎌)〔三〕〔宮〕1006 (鎌)〔種〕1007 (大)〔門〕+鎌)〔大〕1008 住||信門)〔鎌〕〔大〕1009 (門)+鎌)〔大〕1010 (門)+鎌)〔大〕1011 (者)+鎌)〔大〕1012 上方欄外に「者」とあり。1012 (四種)一鎌)〔大〕1013 勸||勒菩薩)〔大〕1014 (動)の左に見せ消ち記号、上方欄外に「動」とあり。1014 一法||四鎌)〔大〕1015 (二門)+鎌)〔大〕1016 (菩薩+鎌)〔大〕1017 種||法鎌)〔大〕1018 者證聞||是證門)〔鎌〕〔大〕1019 (等)+〔大〕1020 (所)+〔大〕1021 (多)+鎌)〔大〕補入記号の右に「多有存款」とあり。1022 薩||提)〔鎌〕〔大〕薩)の左に見せ消ち記号、下方欄外に「提」とあり。1023 薩||提)〔鎌〕||提法)〔大〕補入記号の右に「一生」とあり。1024 (故)+〔大〕1025 (昔)+〔大〕1026 (此)+鎌)〔大〕1027 (多)の左に見せ消ち記号、下方欄外に「多」とあり。1028 薩||提)〔鎌〕〔大〕薩)の左に見せ消ち記号、上方欄外に「提」とあり。1029 (中)一鎌)〔大〕1030 (如)一鎌)〔大〕1032 佛||法)〔大〕底本と明)は一致。1033 薩||提)〔鎌〕〔大〕薩)の左に見せ消ち記号、上方欄外に「提」とあり。1034 卍||涅槃)〔鎌〕〔大〕1035 故||也)〔鎌〕〔大〕1036 者||門)〔鎌〕〔大〕1037 (數)+鎌)〔大〕1038 起||發)〔鎌〕〔大〕1039 薩||提)〔鎌〕〔大〕薩)の左に見せ消ち記号、上方欄外に「提」とあり。1040 者||門)〔鎌〕〔大〕1041 (法)一鎌)〔大〕1042 (法)+鎌)〔大〕1043 花||華)〔鎌〕〔大〕1044 者||門)〔鎌〕〔大〕1045 (應)一鎌)〔大〕1046 (所)+鎌)〔大〕1047 (法門)一鎌)〔大〕1048 示現||中一法門)〔鎌〕〔大〕1049 諸讀||誦讀)〔鎌〕〔大〕1050 (解)の左に見せ消ち記号、下方欄外に「解」とあり。1051 (故)一鎌)〔大〕1052 (男)一鎌)〔大〕1053 花||華)〔鎌〕〔大〕1054 (若)+鎌)〔大〕1055 (次第)+〔大〕1056 (得)+〔大〕1057 (以)一鎌)〔大〕

- 626 六根清浄者、謂凡夫人以經力故得勝根用、未入
- 627 初地菩薩位、應知。如經、以父母所生清浄去眼、見於三(第二十二)紙
- 628 千大千世界如是等。又六根清浄者、於一一根中
- 629 悉能具足見色・聞聲・知香・別味・覺觸・知法等、
- 630 諸佛根牙用應知。眼所見者聞香能知、如經、尺
- 631 提桓回在勝殿上、五欲娛樂乃至說法。聞香知者、
- 632 此是知境、以鼻根知故。持力者、有三種法門示現、如
- 633 法師品・安樂行品・觀持品等廣說。法力、如經應
- 634 知。其心決定知水必近者、受持此經得佛性水成
- 635 阿耨多羅三藐三菩薩故。修行力者、五門示現。一者
- 636 説力。二者行力。三者護衆生諸難力。四者功德勝
- 637 力。五者護法力。説力者、有三種法門神力品中示
- 638 現。一者出廣長舌者令憶念故。二者警亥聲者説
- 639 偈令聞故。聲聞已如實修行不放逸故。三禪指令
- 640 覺悟者、令修行者得覺悟故。行苦行力者、藥
- 641 王菩薩品示現。教化衆生故。又行苦行力者、妙音菩
- 642 薩○示現教化衆生故。護衆生諸難力者、現世音
- 643 品示現教化衆生故護衆生諸難力
- 644 品・陀羅尼品示現。功德勝力者、妙莊嚴王品示

1058 (諸) + (大) 1059 (入) - (大) 1060 (正) + (鎌) (大)

1061 (此義) + (大) 1062 於 || 于 (大) 1063 (故) + (鎌) (大)

1064 知 || 辨 (鎌) (大) 1065 (等) - (大) 1066 (佛) - (大)

1067 牙 || 牙 (鎌) 互 (大) 1068 (此義) + (大)

1069 (故) + (鎌) (大) 1070 知 || 智 (鎌) (三) (宮) 1071

(故) - (三) (宮) 1072 (種) - (大) 1073 (持力) + (大)

1074 觀持品 || 勸持品 (鎌) (三)、(觀持品) - (大) 1075

(者) + (鎌) 1076 (得) - (三) (宮) 1077 薩 || 提鎌。

1078 「薩」の左に見せ消ち記号、上方欄外に「國」とあり。

1079 (行苦) + (鎌) (大) 1080 (種) - (大) 1081 (中) - (大)

1082 (者) - (鎌) (大) 1083 (謂) + (鎌) (大) 1084

亥 || 欸 (鎌) (大) 1085 (者) - (鎌) (大) 1086 聲聞 || 令

聞聲 (鎌) (大) 1087 己 || 已 (鎌) (大) 1088 (者) + (鎌)

(大) 1089 禪指 || 彈指 (鎌) (大) 1090 (念) - (鎌) (大)

1091 者 || 衆生 (鎌) (大) 1092 (教化衆生故) - (大) 1093

(品) + (鎌) (大) 補入記号の右に「品」とあり。 1094 現世

音 || 觀世音菩薩 (鎌)、觀世自在菩薩 (大) 「現」の右に「觀

欸」とあり。 1095 (品示現教化衆生故護衆生諸難力) - (鎌) (大)

「品」の右と、「力」の下に見せ消ち記号あり。

- 645 現、依過去功德彼二童子、有如是○故。護法力者、
 普賢¹⁰⁰⁹及後品中示現。又說言受持現世音菩薩
 646 名、及受持六十二恒河沙諸佛名彼福德平等
 647 者、有二種義。一者信力故。二者畢竟因故。信力者
 648 有二種。一者求我身如現世音自在無異、畢竟
 649 信故。二者謂於彼生恭敬心、如彼功德我亦如是。
 650 畢竟知者、決定知法界故。言法界者、名為法性。
 651 彼法性者、名為一切諸佛菩薩平等法身故。平等身
 652 者、謂真如法身、初地菩薩能證能入。是故受持六
 653 十二恒河沙等諸佛名号、受持現世音名字、功德无
 654 差別。第一序品示現七種功德成就、第二方便品
 655 有五分示現破二明一、餘品向處分易解。
 656 (二行余白) (第二十三紙)
 657 法華論一通 一交了¹¹⁵

1005 依過去功德彼二童子 二童子依過去世功德 [大] 1006
 [善根] + [大]、[善相] + [元] [明] 1007 [力] + [鑿] [大]
 上方欄外に「力」とあり。1008 [故] 一 [三三] 1009
 [菩薩] + [鑿] [大] 1100 [中] 一 [鑿] [大] 1101 [說] 一
 [大] 1102 現世音 觀世音 [鑿]、觀世自在 [大] 「現」の右
 に「觀欸」とあり。1103 [號] + [大] 1104 及 若人 [大]
 1106 [德] + [鑿] [大] 1106 [等] + [大] 1107 彼 號 [大]
 1108 福 功 [鑿] 1109 [平] 一 [大] 1110 [求] 一 [大]
 1111 現世音 觀世音 [鑿]、彼觀世 [大] 「現」の右に「觀
 欸」とあり。1112 [者] 一 [鑿] [三三] 1113 [畢竟得
 故] + [鑿] [大] 1114 [謂能] + [鑿] [大] 1115 [故] 一
 [大] 1116 [法] + [鑿] 1117 [謂] 一 [大] 1118 [乃] + [鑿]
 [大] 1119 [能] 一 [鑿] [大] 1120 [德] + [鑿] [大] 1121
 [有能] + [大] 1122 現世音名字 觀世音名字 [鑿]、觀世自
 在菩薩名號所得 [大] 「現」の右に「觀欸」とあり。1123
 [如] + [鑿] [大]
 1124 法華論一通 妙法蓮華經憂波提舍卷下 [大]
 校注 1 憂 優 [鑿] [三] [宮]
 1125 [二交了] 一 [鑿] [大]

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』 解題・翻刻（浅野）

七〇

参考文献

會谷佳光『大正新脩大藏経』の初版・再刊・普及版の刊行をめぐる（『東洋文庫書報』第五十一号、二〇一九年、二七頁～五四頁）

拙稿「円珍『法華論記』における『六祖壇経』の依用について」（『宗教研究』第九十二卷別冊、二〇一九年、三二二頁～三二二頁）

拙稿「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』について」（『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号、二〇二二年、八八頁～九一頁）

拙稿「興聖寺本『法華論』」（『いとくら』第十二号、二〇二二年、六頁）

石井修道「伊藤隆壽氏發見の眞福寺文庫藏の『六祖壇経』の紹介―恵昕本『六祖壇経』の祖本との關連―」（『駒澤大學佛教學部論集』第十號、一九七九年、七四頁～一一頁）

石川登志雄「興聖寺と一切経」（『興聖寺一切経調査報告書』一九九八年、四四四頁～四四五頁）

石田茂作「寫経より見たる奈良朝佛教の研究」東洋文庫、一九三〇年

伊藤瑞叔「法華論」より見たる『十地経論』の性格について―『法華論』の作者・訳者をも論明する―（『宮崎英修先生古稀記念論文集 日蓮教團の諸問題』平楽寺書店、一九八三年、一一三頁～一二八頁）

宇都宮啓吾「興聖寺一切経における訓点資料について―その素性を巡って―」（『鎌倉時代語研究』第二十三輯、二〇〇〇年、六六二頁～六九〇頁）

大竹晋『新国訳大藏経 法華経論・無量寿経論他』大蔵出版、二〇一一年、九九頁～二八〇頁

大山喬平「西楽寺一切経書写の在地環境について」（『興聖寺一切経調査報告書』一九九八年、四一七頁～四二五頁）

岡本一平「書評 望月海慧・金炳坤編『法華経研究叢書Ⅱ 妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』」（『日蓮学』第五号、二

〇二一年、二七頁～三八頁)

奥野光賢 『仏性思想の展開―吉藏を中心とした『法華論』受容史―』大蔵出版、二〇〇二年

奥野光賢 『三論宗関係文献の本文問題』(『駒澤大學佛教學部研究紀要』第七十八號、二〇二〇年、一三頁～二七頁)

奥野光賢 『三論宗関係文献の本文問題(続)』(『駒澤大學佛教學部論集』第五十一號、二〇二〇年、五九頁～七六頁)

落合俊典 『興聖寺本『馬鳴菩薩伝』について』(『印度学仏教学研究』第四十一卷第一号、一九九二年、二九三頁～二九九頁)

落合俊典 『馬鳴菩薩傳』(『七寺古逸經典研究叢書』第五卷、中國日本撰述經典(其之五)・撰述書、二〇〇〇年A、二六五

頁～二八六頁)

落合俊典 『馬鳴菩薩傳』解題』(『七寺古逸經典研究叢書』第五卷、中國日本撰述經典(其之五)・撰述書、二〇〇〇年B、

二八七頁～二九五頁)

落合俊典 『二種の『馬鳴菩薩傳』―その成立と流傳―』(『七寺古逸經典研究叢書』第五卷、中國日本撰述經典(其之五)・

撰述書、二〇〇〇年C、六一九頁～六四六頁)

園城寺事務所編 『智証大師全集』上卷、園城寺事務所、一九一八年

鎌田茂雄 『中国仏教史』第三卷 南北朝の仏教(上) 東京大学出版会、一九八四年

川端新 『海住山寺の歴史』(『興聖寺一切経調査報告書』一九九八年、四三九頁～四四〇頁)

金天鶴 『金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について』(『印度学仏教学研究』第六十卷第二号、二〇二二年、一五

四頁～一六一頁)

金天鶴 『法華経論子注』写本の流通と思想』(『身延論叢』第二十五号(特集 円弘と妙法蓮華経論子注)、二〇二〇年、一

頁～三二頁)

金炳坤 『義寂釈義一撰』『法華経論述記』について』(『印度学仏教学研究』第六十三卷第一号、二〇一四年、四三頁～四八頁)

興聖寺一切経本 『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻(浅野)

興聖寺一切経本『妙法蓮華経優波提舍』解題・翻刻(浅野)

七

金炳坤・桑名法晃「義寂釈義一撰『法華経論述記』の文献学的研究(一)―(四)」(『身延山大学仏教学部紀要』第十五号、二〇一四年、一九頁―四三頁、『身延論叢』第二十号、二〇一五年、五五頁―六九頁、『法華文化研究』第四十一号、二〇一五年、三七頁―五七頁、『身延山大学仏教学部紀要』第十六号、二〇一五年、二三頁―三八頁)

金炳坤「『三平等義』の成立に関する研究」(『身延山大学仏教学部紀要』第十七号、二〇一六年、一頁―三四頁)

金炳坤「流布本『妙法蓮華経優波提舍』考」(『宗教研究』第九十卷別冊、二〇一七年、三〇六頁―三〇七頁)

金炳坤「妙法蓮華経論子注」研究史概観」(『身延論叢』第二十五号(特集 円弘と妙法蓮華経論子注)、二〇二〇年A、九頁―一八頁)

金炳坤「世親『法華論』の流伝に関する諸問題―見直されるべきテキストを中心として―」(『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年B、一頁―一六頁)

金炳坤「流支訳『法華論』の流布本について―序品を中心として―」(『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年C、一七頁―一三三頁)

五三頁―二四〇頁)

金炳坤「序」(『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年E、i―vi)

京都府教育委員会編『興聖寺一切経調査報告書』京都府古文書調査報告書第十三集、一九九八年

桑名法晃「『法華論』版本の研究―清水梁山国訳『法華論』の底本を視点として―」(『東洋文化研究所報』第二十号、二〇一六年、一七頁―六二頁)

桑名法晃「清水梁山国訳『法華論』の底本について―版本『法華論』の流布と受容を視点として―」(『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年、二一頁―六七頁)

国際仏教学大学院大学・日本古写経研究所編『日本現存八種一切経対照目録』改訂版、二〇二一年

斉藤達也『興聖寺一切経本『續高僧傳』解題―巻四支装傳を中心に―』（『續高僧傳 巻四 巻六』日本古寫經善本叢刊第八輯、二〇一四年、一〇二頁～一二八頁）

佐々木勇「根津美術館藏春日若宮『般若波羅蜜多經』における注記・注文および訓点の概要」（『根津美術館蔵「春日若宮 般若若経および厨子」調査報告書』二〇一八年、六一頁～六八頁）

佐藤禮子「調査報告 興聖寺舊藏の典籍―「興聖寺公用印」に關する覺書―」（『中國典籍日本古寫本の研究』No.1、二〇一四年、一三頁～一五頁）

塩田義遜「法華論の研究」（『棲神』第二十八号、一九四三年、一頁～四八頁）

清水梁山「国訳妙法蓮華経優婆提舍」（『国訳大藏経 論部五』国民文庫刊行会、一九二二年）

清水梁山「国訳法華論開題」（『国訳大藏経 論部五』国民文庫刊行会、一九二二年）

末光愛正「吉藏の法華論引用に於ける問題」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第十五号、一九八三年、一〇三頁～一一三頁）

竺沙雅章『宋元佛教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇年

池麗梅「興聖寺一切経本『續高僧傳』―刊本大藏経本と日本古寫経本との交差―」（『續高僧傳 巻四 巻六』日本古寫經善

本叢刊第八輯、二〇一四年、二六八頁～二九九頁）

塚本善隆『北朝仏教史研究』塚本善隆著作集第二巻、一九七四年

中井本勝「吉藏撰『法華論疏』の文献学的研究（一）―（五）―」（『智慧のともしび―アビダルマ佛教の展開―中国・朝鮮半

島・日本篇』山喜房佛書林、二〇一六年、一六三頁～一八九頁、『身延論叢』第二十二号、二〇一七年、二二頁～四二頁、

『法華文化研究』第四十三号、二〇一七年、二五頁～六七頁、『法華文化研究』第四十六号、二〇二〇年、九九頁～一二八

頁、『身延論叢』第二十六号、二〇二二年、二九頁～六三頁）

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻（浅野）

興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』 解題・翻刻（浅野）

七四

- 野沢佳美 『印刷漢文大蔵経の歴史―中国・高麗篇』 シリーズ・アタラクシア Vol. 3. 二〇一五年
- 藤井教公 『世親『法華論』 訳注(1)―(3)』 (『北海道大学文学部研究科紀要』 第一〇五号、二二頁―一二二頁、第一〇八号、一頁―九五頁、第一一一号、一頁―七〇頁、二〇〇一、二〇〇二、二〇〇三、)
- 藤善真澄 『道宣伝の研究』 東洋史研究叢刊之六十、京都大学学術出版会、二〇〇二年
- 襄輪顕量 『金天鶴『法華経論子注』 写本の流通と思想について』 のレスポンス (『身延論叢』 第二十五号(特集 田弘と妙法蓮華経論子注)、二〇二〇年、三三三頁―三七七頁)
- 宮崎展昌 『大蔵経の歴史―成り立ちと伝承』 方丈堂出版、二〇一九年
- MOCHIZUKI Kaie. *Vasubandhu's Commentary on the Lotus Sutra in Tibetan Literature*. 邦題「チベット文献において言及される世親の『法華論』」(『印度学仏教学研究』 第六十五卷第三号、二〇一七年、一二五頁―二三二頁、(和文要旨) 四〇九頁)
- 望月海慧 『世親の『法華論』について』 (『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』 法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年A、一頁―一九頁)
- 望月海慧 『世親『法華論』のチベット語訳は存在したのか』 (『仏教思想の展開』 花野充道博士古稀記念論文集、二〇二〇年B、一八一頁―二一四頁)
- 国際仏教学大学院大学・日本古写経研究所「日本古写経データベース」<https://koshakyo-database.ics.ac.jp> (参照: 二〇二二年二月二二日)

〈キーワード〉 興聖寺一切経、『法華論』、菩提流支

Japanese Association of Indian and Buddhist Studies. Following this, the author conducted fieldwork in November 2021 and was able to consult the actual materials, the new findings of which are described in this paper.

Keywords: Kōshō-ji Issai-kyō; *Hokkeron*; Bodhiruci

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

Summary

Bibliographical Introduction and Transcription of “*Miaofa lianhuajing youbotishe* 妙法蓮華經憂波提舍” in the Kōshō-ji 興聖寺 manuscripts

ASANO Manabu

The purpose of this report is to reprint the previously unpublished Kōshō-ji Temple manuscript, known as the *Miaofa lianhuajing youbotishe* (*Hokkeron* [*Treatise on the Lotus Sutra*], hereinafter “*Hokkeron*”) to make it available for further research.

In the bibliographical introduction, characteristics of old manuscripts and older publications of the *Hokkeron* that have been handed down within the Rinzai Sect Entsūzan Kōshō-ji Temple, as well as their text systems, are explained based on previous research. This reprint is based on the Kōshō-ji manuscript of *Hokkeron* in one volume (tr. by Bodhiruci 菩提流支, copied in Heian Insei period 平安院政期), collated with another Kōshō-ji manuscript of *Hokkeron* in two volumes (tr. by Bodhiruci 菩提留支, copied in Kamakura period) as well as Taisho version 大正新脩大藏經 including variant readings in Song text 宋本, Yuan text 元本, Ming text 明本 and the Imperial Household Agency text 宮内庁本.

From *Kōshō-ji issaikyō chōsa hōkokusho* 興聖寺一切經調査報告書, it was understood that both *Hokkeron* manuscripts, namely in one volume and in two volumes, were in the Kōshō-ji Temple issaikyō; however, at the time, only the bibliographic information had been published, meaning that their specific content remained unknown.

Fortunately, the author was able to view a photocopy of Kōshō-ji Temple's original *Hokkeron* in 2019 and introduced some new materials in 2020 at the